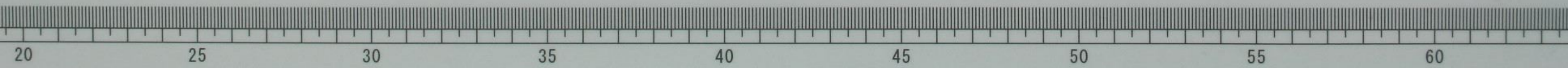




天明  
改訂  
女子読本

B  
1009

逍遙文庫  
文庫6  
2011



文庫6  
2011

序



箱板のありありと  
 ありと夜ゆくを  
 てや恋つるを  
 女くけ書成題  
 死ん松梅の位  
 かなくても若や  
 つらき月夜よ  
 風のありと  
 恋のふたは

牡丹牡丹の如く人々を驚かす人々  
如く花柳の情海に沈む  
乃日くくよあ〜あお  
うり新町とて思ふ  
と思くごま〜毎  
唯へとちれやちん〜

二年店

あり

あま

迷

あまさうろ夷俗  
の傾城と轉々  
あ〜免〜  
さ〜あ〜  
艶由艶由が花柳風  
能〜あ〜  
及〜あ〜

集曲の如く  
 其の心とく  
 疑の古集と  
 ありはるし

流石殿

凡例

大坂新町惣名寄の事元禄年中  
 小色之味深ある色里書物とて  
 多岐一其後室永年中小色は  
 号し改定一其後改定一  
 口又年類小思ひ立新政正一委  
 撰今新町といふことの方角より  
 考出所少名の由来と作部中  
 名所古の年中約り其の在り  
 古例亦まうと考合洋事と  
 和洋柙陌の通号称号記の  
 部著京一月子斬とらるる  
 記一五五のいふ小畧一勿論  
 引用之目録と書のことこれ  
 の連面とく知る



一 花街名所古跡

并

蕪嚙古例

越中橋竄初

櫻家敷春真

附 櫻井清冷

松家敷技折

觀音裏隨緣

道者横町掛来由

高瀬庭佳境

山家敷勝景

螢澤水嬉

一 花柳年中行古又

一 揚屋無雙

一 同座敷画圖

一 茶屋負敷

一 里詞笈

一 太夫品

附 越中

夕霧粉

吾妻

一 傘印

一 長持運送 并 調度通用

一夜書解

遊女解

引舟初發

松山

仕着行粧しせいのまじり并な二日着ふたひのき  
三日着みっぴのき

身請門出みまがひのしで

天神位階てんじんのおゝん并な小天神こてんじん  
店天神てんじん

鹿子位部類かしのゝん

附つ月影つきかげ以も相當おなひ

牽頭女郎情けんとうのぢやうじやう并な藝子風俗げいこのふうぞく

竹籬節一曲たけきりぎのちやく

句暖くわん竹魚たけうい差別さべつ

和氣わき称号しょうごう

禿かぶ由緒よし

呼迎よむかへ女にょ古實こじつ

勸進くんじん芝居しばい太鼓たいこ不打ぶた由縁よしゆゑん

夜見よみ世よ般ぱん糸花いとばな

限太かぎの鞆たる作法さくしや

價あしひ諸しよ分ぶん

紋もん日定目ひのでうりく

方角わうかく大田おほの各圖かくず

惣名そうな寄人よりの別べつ

一 藝者部類

以上

大坂新町 渡標  
細見之圖

○ 廓紀原

為津の柵泊へ往昔天正慶長の比  
より諸所は橋本を抱渡世のこの  
しを寛永永年中今村去地を  
おくれ諸所の橋本を一所に  
一廓の四小軒をあらせ其  
亦次良といは浪人者小石廓の  
店屋等を被お 仰付水くけ  
せ、町と必今室曆七年ま  
百三十年余少なり也

○ 新町同基 并 町小名因縁

新小町より新小町より世



新所とよふ想存あり又やの海をい  
中とよ

香稻庵  
竿秋

新所のありの  
あきう  
汐干浮

▲瓢箪町 但南組

通る路あり其の道頓がり小  
ひやうたん町とて其所の二町元和  
の比は三ころへ移り又右左の曰  
元來伏見浪人よ本村又元和と  
いつる浪人ありし由け人元本村氏  
の乳の人の子ゆき故ありと豊  
住家市馬平の瓢箪と傳來で  
お持と故小水存くはるう元和

寛永の比本村をかきり本村屋又  
元和と名宗廟七所の想存ありて  
元和よハ武具を譲りあきり小二  
代目又元和ありて元和年平小  
後元和ありて元和年平の後  
断絶をすまきい新所通るを  
又元和ありて元和も其後あり政と  
瓢箪町といひありはるこれ新所  
橋を越く通る也

▲作渡湯町 但南組

元正長のはよりと將存ありて  
作渡湯とよふ湯とよふお後の地  
あり小寛永の比今の比より一廓  
の内小水とよふ湯屋祭の縁ありと  
作渡湯町とよふは西の一町を依りて

紙後町といふ事は、紙後紙後と並の  
玉の縁をとり、作後等町の次を紙後  
町といふ也

▲古原町 但北組  
斤系町也

北天は、ゆふ吉原といふ所とあり  
それより移を故名に、と云、寛永  
年中、小倉のありは、又通和  
の北を、河波屋といふ

▲新・京橋町 但北組

▲新・酒田 日新

これ、ゆふへ、河波屋あり、と  
云、長年中、ゆふと、ゆふといふ  
あり

▲九軒町 但南組

け、取揚屋といふ、最、は、取、り  
こ、に、揚、屋、九、軒、を、取、立、る、町、也  
かく、れ、と、い、ふ、也、又、揚、屋、町、と、い、ふ  
根、生、の、揚、屋、九、軒、町、と、今、一、軒、あり  
又、新、酒、田、と、二、軒、紙、後、等、町、小、二  
軒、合、十、二、軒、と、又、と、い、ふ、也、あ、ま、い  
揚、屋、と、い、く、に、揚、屋、の、初、小、出、を、  
む、け、町、年、あ、い、ま、な、り、け、せ、い、屋、  
と、い、は、拾、列、と、い、ふ、法、幸、み、人、の、交  
配、を、交、る、り

▲作後町 但南組

往、古、高、藤、と、い、ふ、乃、住、人、小、作、後、を  
と、い、ふ、と、い、ふ、人、と、い、ふ、人、と、い、ふ、人、  
と、い、ふ、人、と、い、ふ、人、と、い、ふ、人、

三紀打あまりの地と故あつてお  
 領一町一家あまらうあつて  
 佐渡屋町と云其後たき清らう人  
 小賣渡一漸佐渡屋といふ名目  
 小名而こ小強きり但し町年経  
 こまかり代に孰る所年ある屋  
 支配を佐渡屋忠義といふ人  
 之後完全冷屋津浦松屋宗甫と  
 いふ二人二子割ゆづり又松屋  
 より完全冷屋へ一所ゆづり今い又  
 一町一屋あまらう一増二ツ小  
 多れ一故今二町役之完全冷屋い  
 四代はきまより平野屋中郎を傳  
 といつ商人買得しと二代はきま  
 之後おまはしく替りけ屋き世四  
 年日あ享保九辰年大坂大火あて

乾焼しと平又乾の内茶屋高賣  
 のとの信宅しと居りしに乾焼後  
 八挺屋おまらう大座あまらう此  
 郭にあられた屋敷此お七町とらうり

○ 柵沼格式

お遊廓の内何ふらう佐渡屋  
 本村屋又本庄屋おま配の格を以  
 今小又町の年あまらう

○ 新町橋年曆

西横堀順又町おまか佐橋あり  
 往右に廓一方口あまらう一其時  
 分よけ橋お一東西の門津敷を  
 の後寛文十二子年小とめくろり  
 此れ廓敏報白の爲小橋ひし火



廓中やうくを修むれば新田など  
子則強ふあはると今に至るまで  
八十六年あり

○東西大門遊鱒

東西大門は小町一丁目  
遊鱒は用之を門をたてめ  
入申すものをもとめ物よきもの  
は又遊鱒は論あるは根籍もの  
ちどはる捕る所の番所常の女  
師亮出入の改所之遊鱒年中  
は米田所へはく持てまあつてい  
等の用を具申放免ありしは  
享保九辰年出火して焼  
こす後ハんごありあき

○去地方角考

東西接堀御左衛門町堀屋町  
堀をたつ町を限り西ハ立賣堀南表  
町南ハ長堀北側年をたつ町  
町南田舎町かきり北ハ立賣堀南  
側町をたつ町南表町を限り東西  
の大門は小町遊鱒をむくハ西一  
方町ありありハ明暦三酉年小  
東の大門は散免をくすはり東の  
の大門は其後寛文八申年小  
用公門又ハ新田散免をくすはり  
あけをありし小町保九辰年小  
大坂新焼後吉原町の門をくす  
又宝曆四辰年新田遊鱒小門を  
くすはり年保九辰年東の門を

初きし也これあり今ハ門スケ  
あり各番あり

○花街名所古跡

▲ササ噺之古例

此新町風祭の以て通る小  
新屋といふ女郎屋ありけり  
の末は清浄なるといふ人  
一と武年の善小雑賣の餅  
調へて子々ササ餅の  
元朝の祝儀おさかん  
次第小娘目一と後ハ大分限  
なり其例もまた毎年雜賣小  
かぢりを入き祝儀一とあり世人  
ササ噺といふ名を今ハ家  
くか

▲城中橋取初

寛文年中新町庄屋年寄と居り  
居たり木村屋又赤帯抱  
全盛の女郎毎揚屋入  
限よ見和の老若男女  
志也又小元満一  
さく則又庄屋家の妻  
町へありありを  
橋より揚屋入る  
世人誠中橋と云

宝治百首

為徳物

あふれ我恋ふ心と

さくさく  
まのこけりん

▲櫻家友妻貞

并三ノののり  
松井清冷

元禄年中まゝ通り筋小松屋友妻  
松屋友妻とくも松屋一まこと六彼  
芝罘と云名一とらあこじ松清妻  
家友治小大木の松あまこま一  
九折町おげ松井竹屋大長清の  
是と雲海一持信へり毎年去毎  
小松屋松井竹屋の松やまこと松見  
大長くんちてま張りま松見  
卯酉四月八日松焼して今いし  
け松屋松井とてま松清あま  
ま松屋友妻の通り筋あり

家集

源三位松政

松子も花のふと人のひまも  
くしやふくもや子のまも雲

▲松屋友枝折

又松屋友妻といふるまこれを通り筋  
松や一まのむらい南側小松屋と  
いふ女良松も其妻小大木の松も  
これも見付小成松の樹あり一  
南此の名おありこれま松清元卯酉  
の出火ま松焼一松さくらも今い  
か

五世集

後松野村

松屋のうま松宿の地まはち  
あのみくらも子代いま

▲観音寺裏隨縁

石治寛文の比通筋西大門口南側

門前の屋敷小茶師堂大室といふ  
三室院流の山伏あり二層四面の堂と  
建字の寺あり延宝の比彼茶師堂  
を白髪町くんとんの池へ移と彼  
くんとんも大室取手のゆへに  
右門口南側の家友を今取のく  
くんとんくんとんを事と云

▲道者横町扱子掛来由

及志横町といふ流第町東の山より  
一丁目の由へ入横町之妻屋志多  
くけ横町和氣江の見せ付とん  
志多とる故と名を又扱子掛と  
りし東の門へ入志多北へゆき新  
志多横町のみ横町を云子掛の  
和氣女師の見せ付のゆへに

のまふ今小まつとも板の端を是  
くけ里さ泥のあふき扱小似りて  
俗よ扱子掛と云ふなり

▲直瀬庭佳境

若原町の東小瀬原とつる茶屋  
の庭水あゆみとつるく庭水  
ありとつる庭水は所よりあり  
くけ事ありとつる物の庭水あり  
くけ事保年中少終く今に

▲山家友勝景

若原町の西の端小次木屋寺并  
といつる女師屋の長あり其庭  
くけ庭水氷とつる樹木苑石苑  
敷ありかといふ庭水申小おと



昔はくし英はくし花やうる幸と  
ごもりし小春保三戌年おとおの  
今ぶら

延丈百首

為乃女

世のうさふがくはくを海にん

いづも山のわらりし

▲ 望天水嬉みづのこのまいご

又六十年よりおもう佐波宮町妻  
あけの原へ家々の庭軒を掃いて  
掃きあきらむる左の磨州つぎ佐くも  
うらうへ散乱しき宮治津田の曲ゆがを  
おとしおとしめぬ廊中のく計  
其比よお見物けんぶつをうらうらな  
望おびた下く花はなうらうら大匠だいしやうを

もいでや見物けんぶつんと揚屋やうえより毛けを  
おろし竹床たけとこにぶかぶかあや中ちゆう酒しゆを  
おとぼしおとぼしをうらうら水をさくく  
宵夜やよひの一興いっけいふらうらふらめい  
あま色の藝ぎ塚づかうらうら中ちゆうにまり  
このまをりし小今こいま二つの名なに  
とありしうらうらきもけ新あらた好この好この局きゆう  
の基もとありとおちる

● 花柳年中はなぢゆうなちゆう終しゆう夏なつ

正月しょうげつけ里さとの嶽たけにありし  
がしあうら大匠だいしやうをうらうら  
幸さいぶらうら五月ごごつ用もち地ぢ故こ通とほと一いち冊さつ  
幅はたをさ故こ一いち統とつをうらうら  
がし横町よこまちをうら免めん隣町りんまちへまいと  
瓢ひょう草町そうまちをうら故こ更さらありし

二月 初年二十年廿二日彼居中  
付里の段日あく振りきり也

三月 毎年去る二月橋さりの比  
より若きより和振るごと通るは  
あつたをなと賣るの橋をえんト先  
山吹或は牡丹若菜百合は湯州  
夏菊の四はまぐまは是よりな振  
るく一真也

十万堂 来山  
花咲く死をむない  
病の邪

四月 八日花橋あがり也

五月 門松あがり通るおのちり  
をまど男子も家とい居宅のうら  
まらぬれも所偏せぬは用也乃

さほけのあつたをえん  
と免儀所はゆをえんかくいあは  
取目もく法客入はとる振り

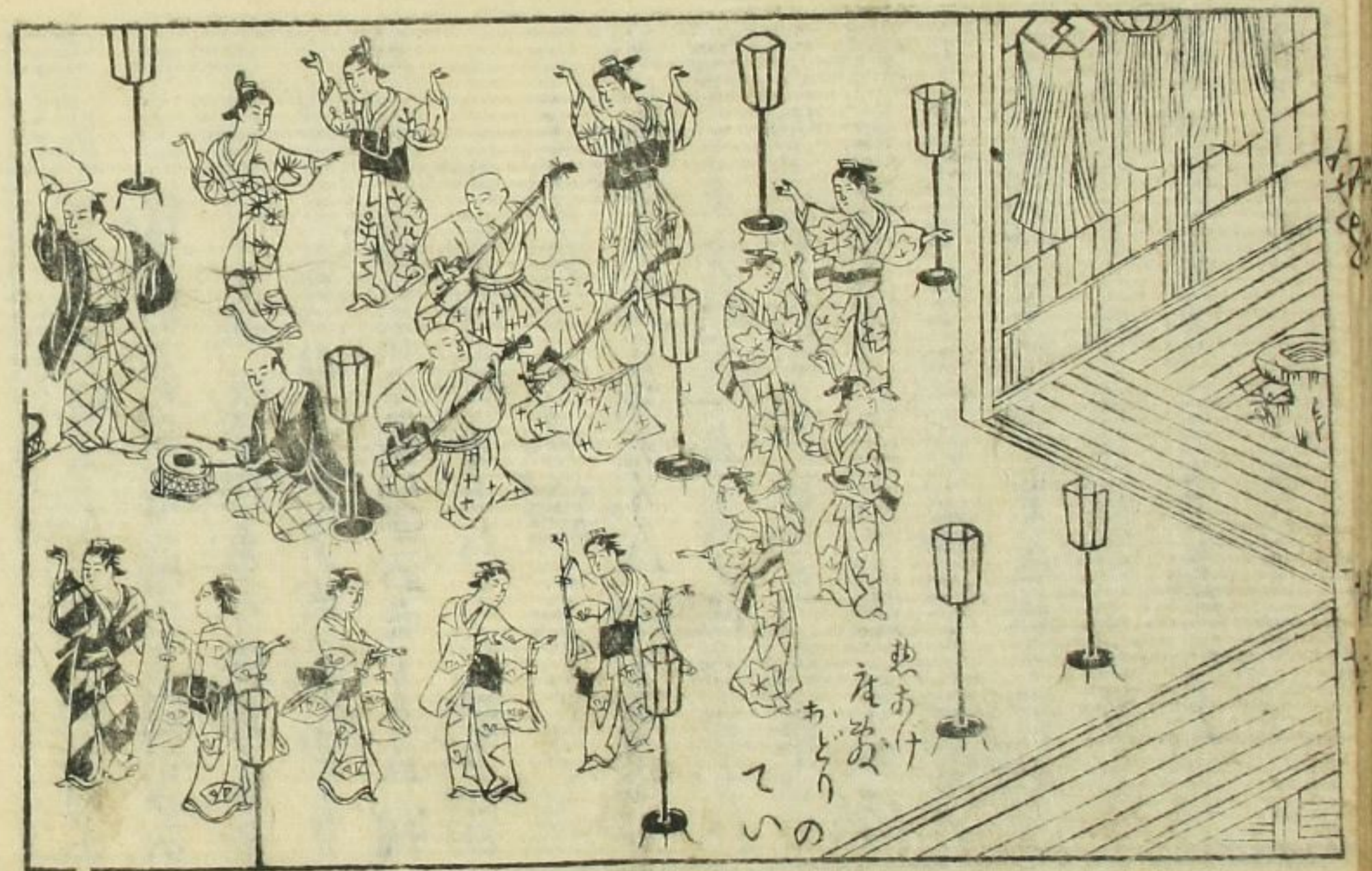
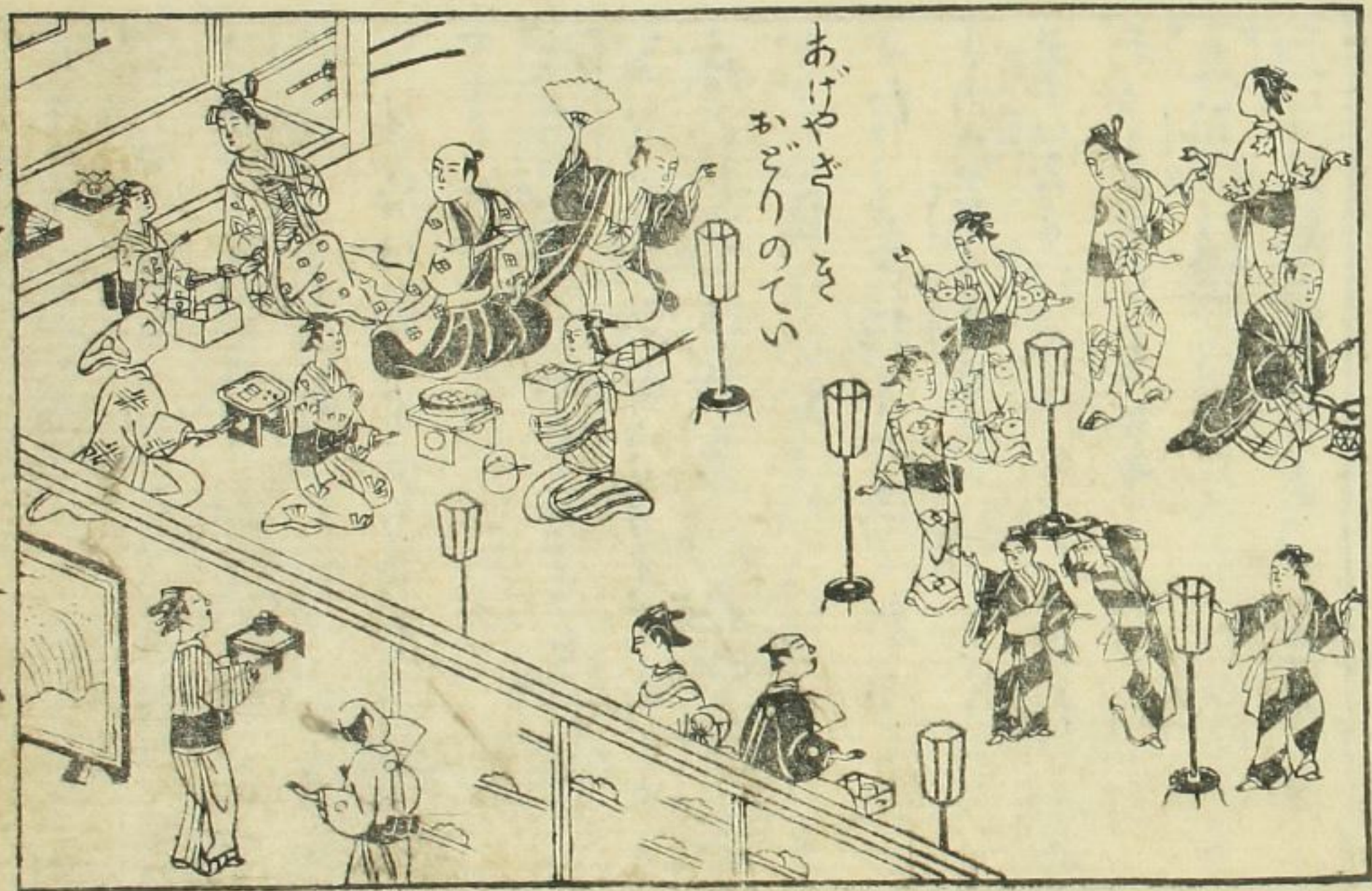
六月 苗月中の法客の由振あて  
りまけ里の群集申やもまの所  
あつたに法天白まやけり廿一日あつた  
むくら町あつた外の振りし満  
人從撲る免儀一廟申は又段日  
あり年小より福をおみあつた

七月 七夕あつたはとる中振り  
けいせいの大勢はまや  
あまの川

例年十月廿七の所より又ツ町まどく

聖堂のまわりの市と東の門の  
通のまわりの側にお店をこころよく  
出所のまわりの勿論他ありも貴人  
あり難きをたすすはすなり  
より悔まきぐ大改自りは月たま  
確とつらとあり新町たま確と  
ひらうはまり確のふらも他和のと  
珍りともふら風派ありまきこれも  
例年まらふ不定りはこころい年この  
ふらあり信をまき或は町く大乃  
あり町確の幸もあり又先年  
佐波町町あり確場とたま入本戸  
を信り客一人は確子一人に揚を  
ま料まき確入用をまらひら  
幸もまけとねい字をこれ取沙は  
よりかまはし人中絶らうそのち

角の船ゆく寛保二五年廟の四小  
おら場とたま女即場より陣子の  
世信ら一確場新報の揚を茶屋  
よりて一見おのあげ茶屋より  
おやの見をて七月十五日より八朔  
まらまきけ信方よりく舞白  
ありかまはし又中絶ら  
又大まらより幸あり八朔まき信を  
確と一まらと二日より秋のあはれ  
を知るをたまやる大屋ありく  
揚を屋敷におおく廊中の漆  
あり女即を新と揚切くあはれ  
は交確を信と幸也今ふあり  
大屋ありく大まら世の屋敷もどり  
まはし花やうまら幸もあまらび  
か



又廿年いんげんの多岸たがし小工こご中ちゆう歌か小  
燈籠とうろうを仕しおし紙かみ舟ふね上かみ路みち子こぶと  
さほくも紙かみを仕しおれどもは内  
風かぜ相ありあありと燈あかりをあかりち  
かを信しん仕し出でしものありとあかり合あひ  
やや〜

八月はちがつ 名な月づき小女こめ郎らうより客きやくへもく  
あとして松まつ折おちと事ことを花はな英えいと  
居いり或あるは所ところ車くるま八はち系けいやくと船ふね  
かどさほくのおとしはきやくかみ燈あかり  
小こひ〜きかみ種くさねの遺ついでり物ものをあかりはめ  
とのかみ蒸む草くさ子こ又または酒さけさうあわしい  
茶ちや心こころあは仕しお〜とさるあはれあはれ敷しき奥おく  
あつちやく〜ままあまあま連つら〜

九月くわがつ 後ごの月づき見み八月はちがつの格かく或あるは  
月づきド又また依よ所ところの及およぶありと苗なえ月づき中ちゆうの

大おほ敷しき日ひ也なり六む月づきの四よ後ごと日ひ日びつのひふて  
くり〜い奥おくの敷しき日ひ定さだまはあひり也なり

秋あきの早はや者もの男おとこはあうぬ  
〜のちれい  
推おしか  
力ちから磨こ

十月じゅうがつ 美みの子この夜よい揚あげをいこま  
後ごふふふきりきり〜とあ氣き溝ぞう十じゅう夜や  
〜の勿な論ろん〜

十一月じゅういちがつ は月づき敷しき日ひ多た〜と〜も敷しき台たい  
家いへの燈あかり掃はき〜れ敷しき也なり

煌きら輝きらと〜掃はき〜来きい  
室むろ晋しん野の  
其その〜因いん  
母はは二に房ふらうめは〜や

十二月じゅうにがつ 奉ほう〜め家いへの餅もちは〜と

ナト  
ナト

中の大祝や、舞臺の廊を、  
本座より、其余の段目、奥小自浪  
係へ

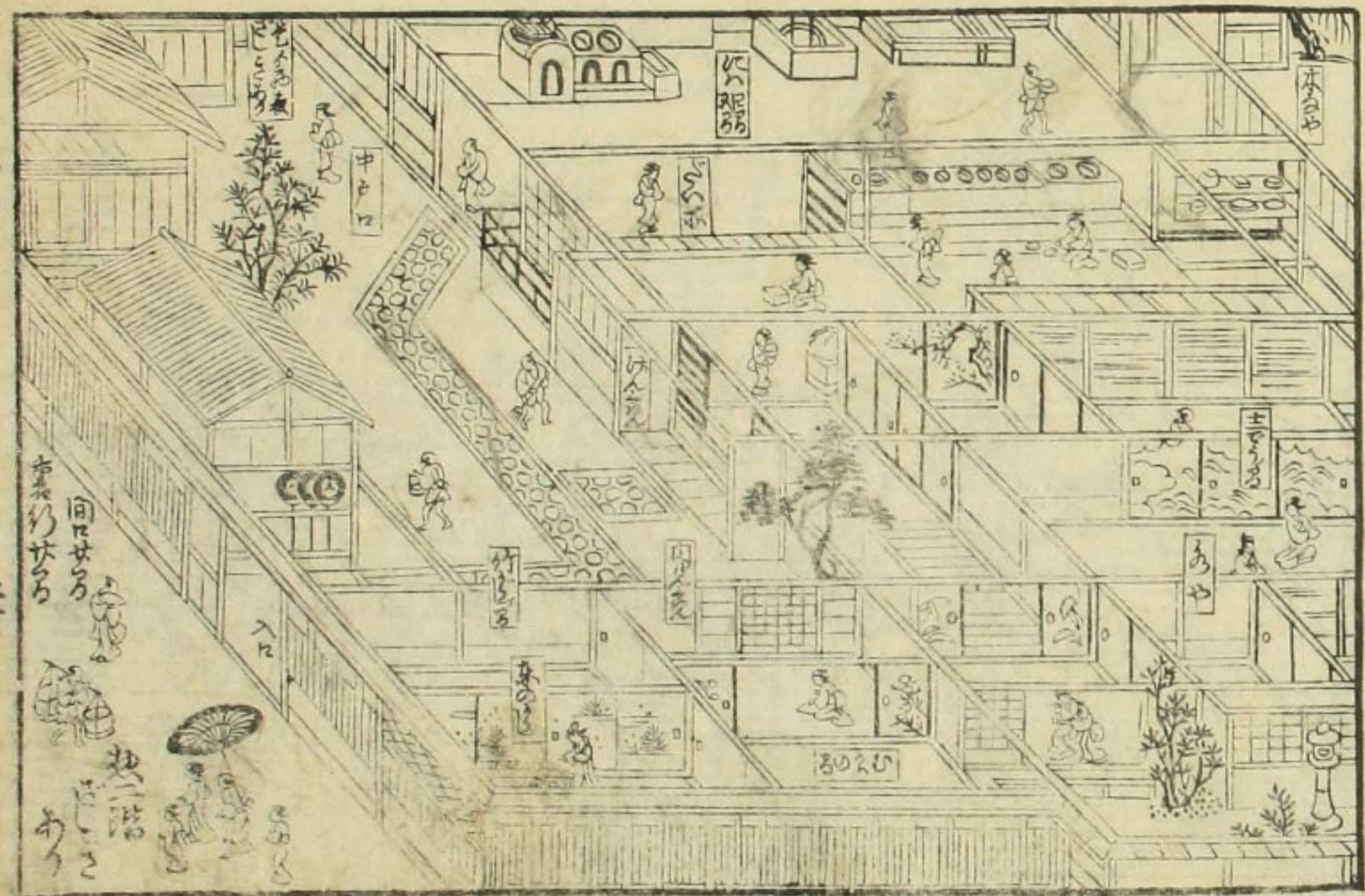
○揚屋魚雙

諸玉小くりとつるそのまゝ  
とつるも高津の廊を、  
あり舞子付地乃揚屋小勝里、  
ありされおりの大長連の、  
小系崎東の女郎小江戸、  
張をもとせ長湯丸山の、  
あせ大坂新田の揚屋、  
とつとつひ、  
とつとつひ、  
とつとつひ、  
とつとつひ、

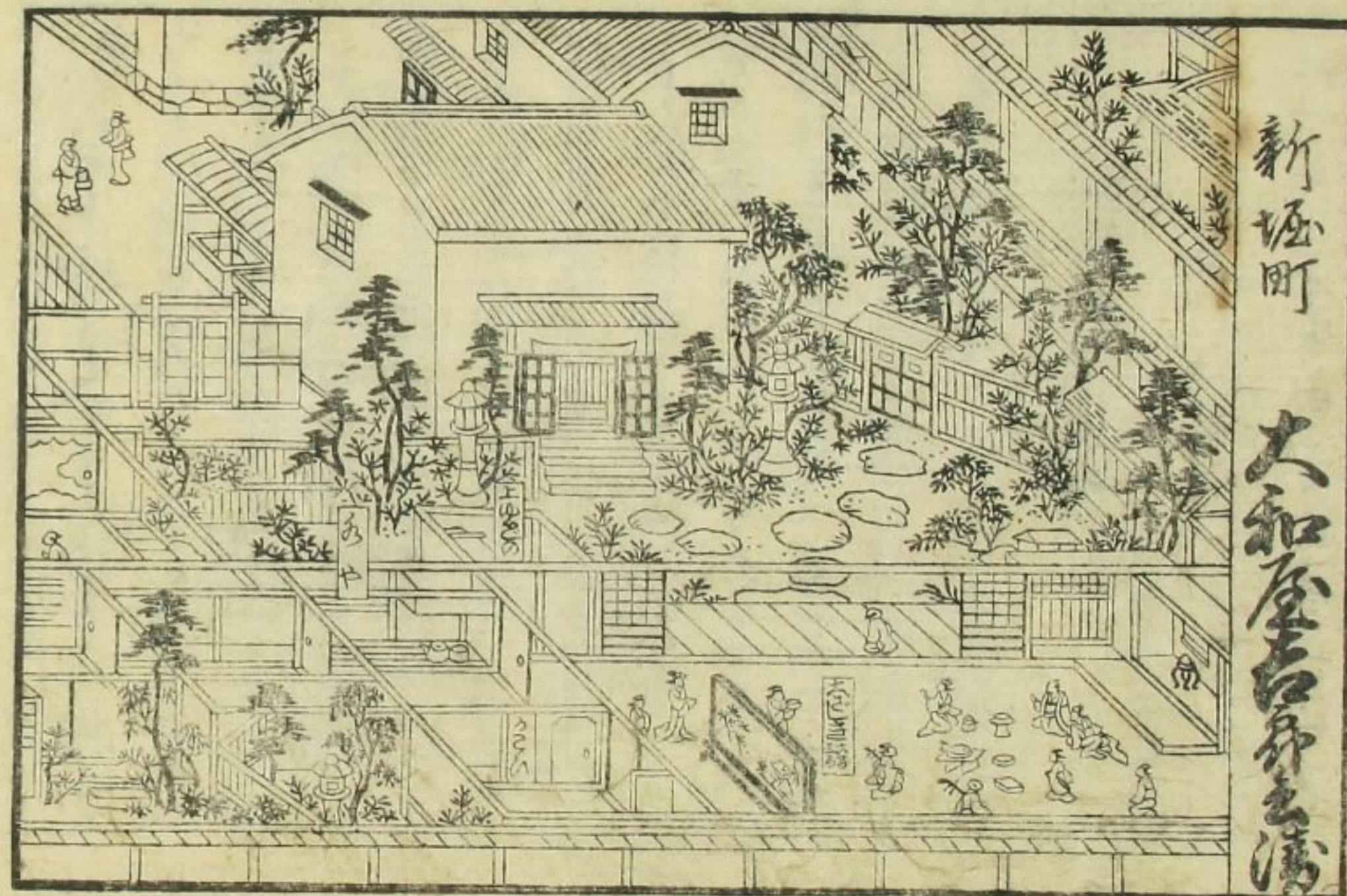
かくいある海と、おとる、  
つもい所よ、  
東小川を、  
そびへ山あ、  
の面の、  
筆やも、  
揚屋を、  
と余の、  
と余の、  
いづれも、  
天神を、  
かゝ依、

九折町井筒屋  
沖煙亦負押

あゝとあゝの色の、



同門女房  
 兼二階  
 兼二階  
 兼二階

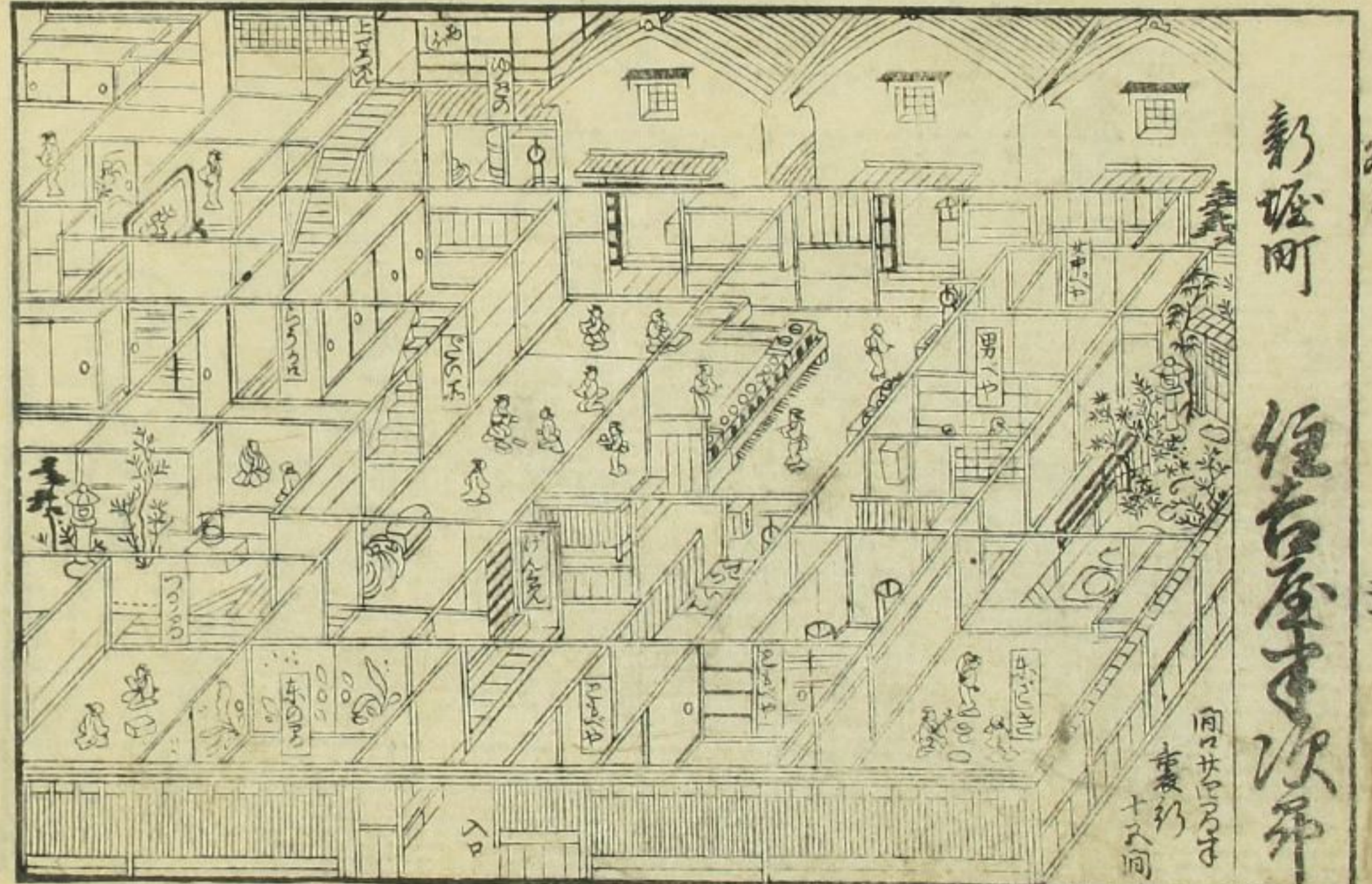
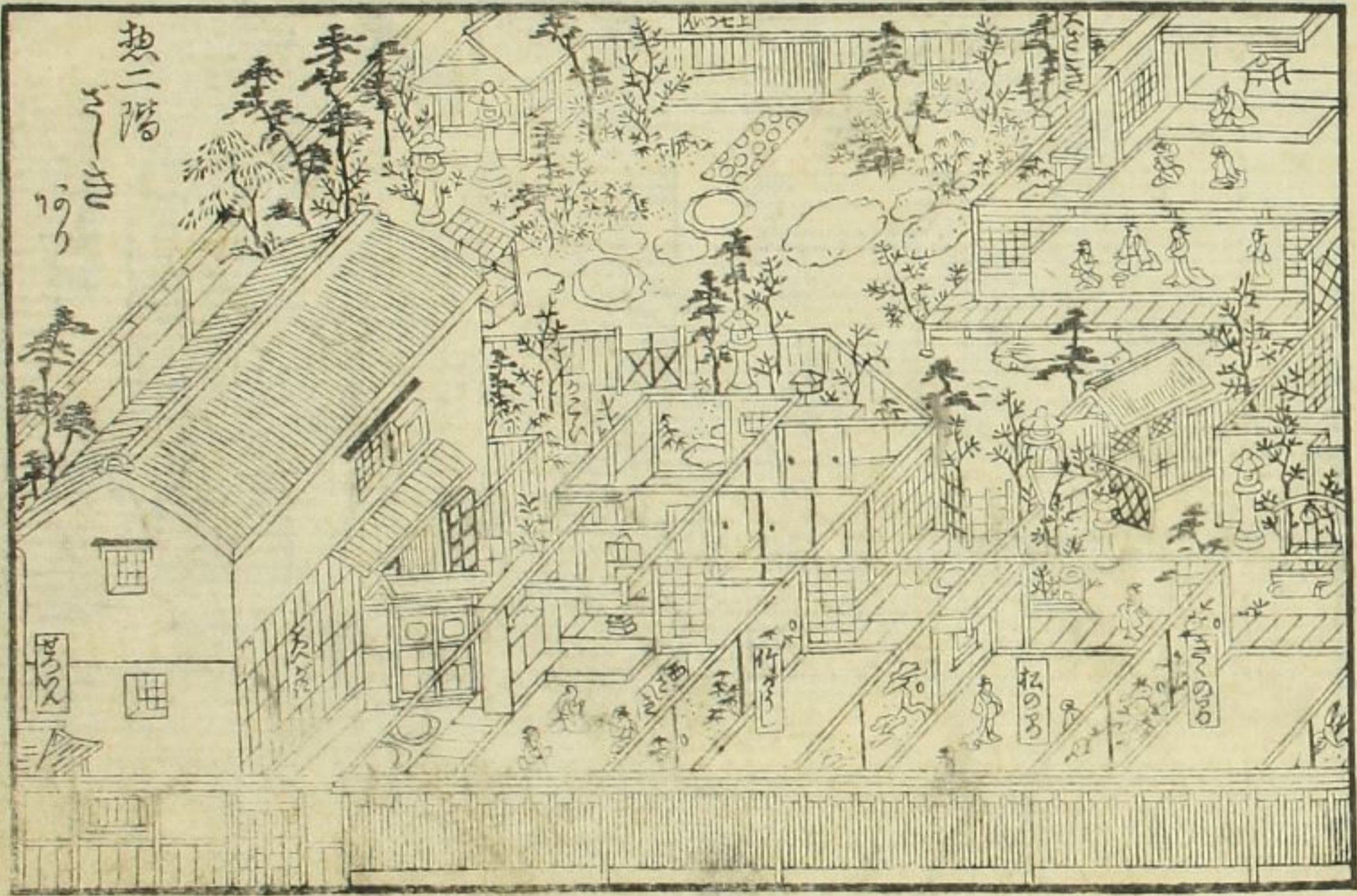


新垣町

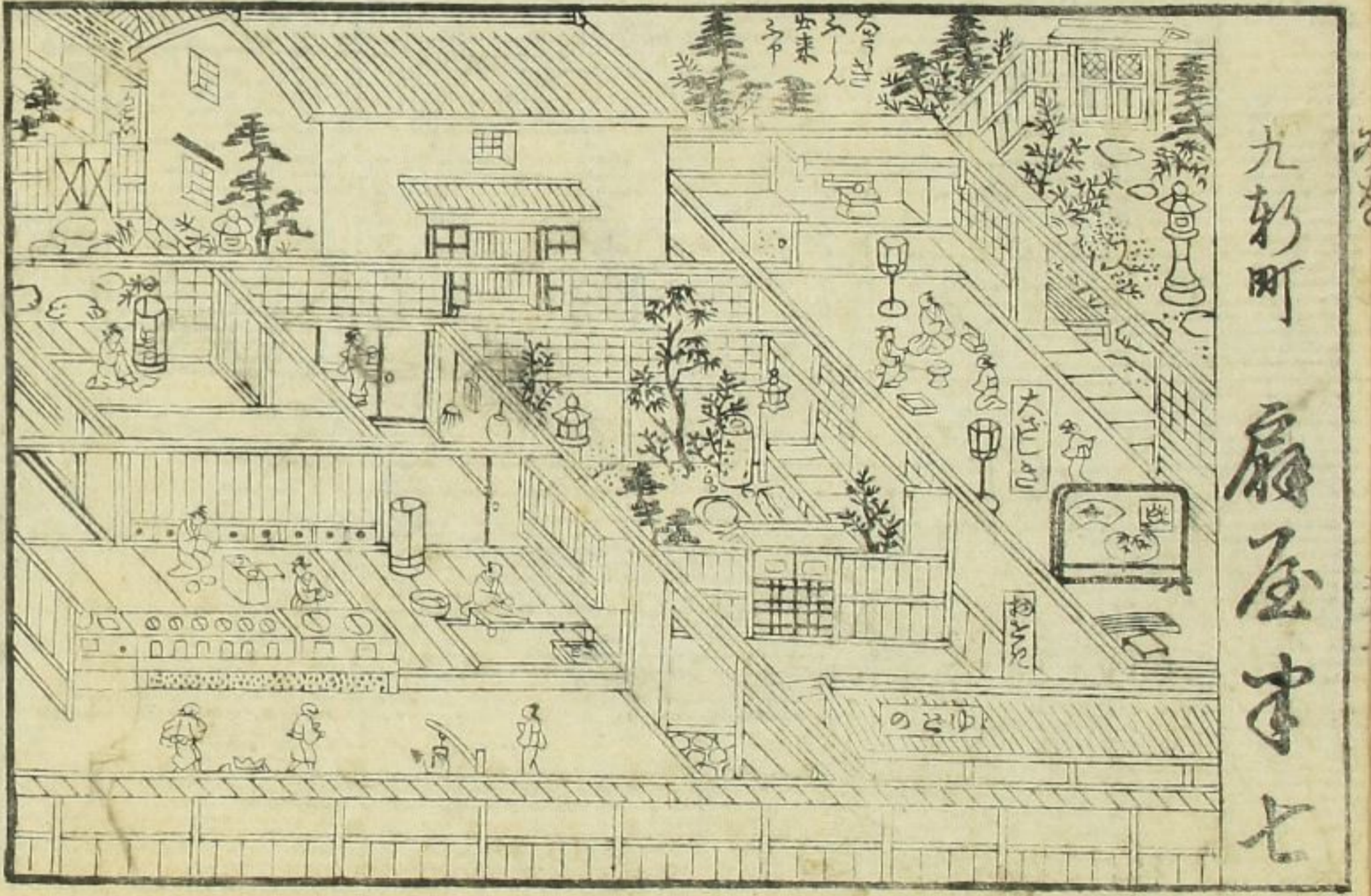
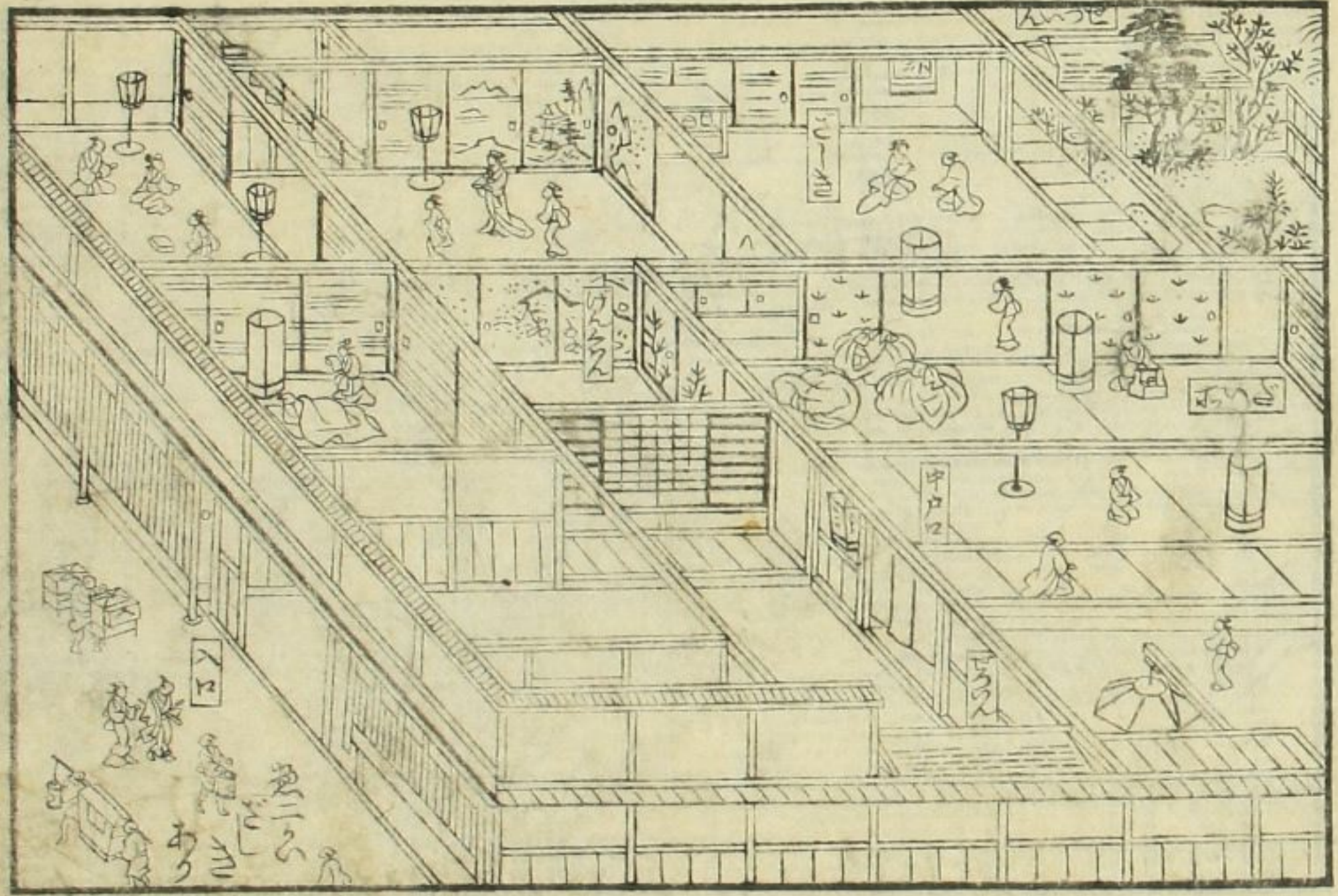
大和屋吉兵衛去満

新垣町

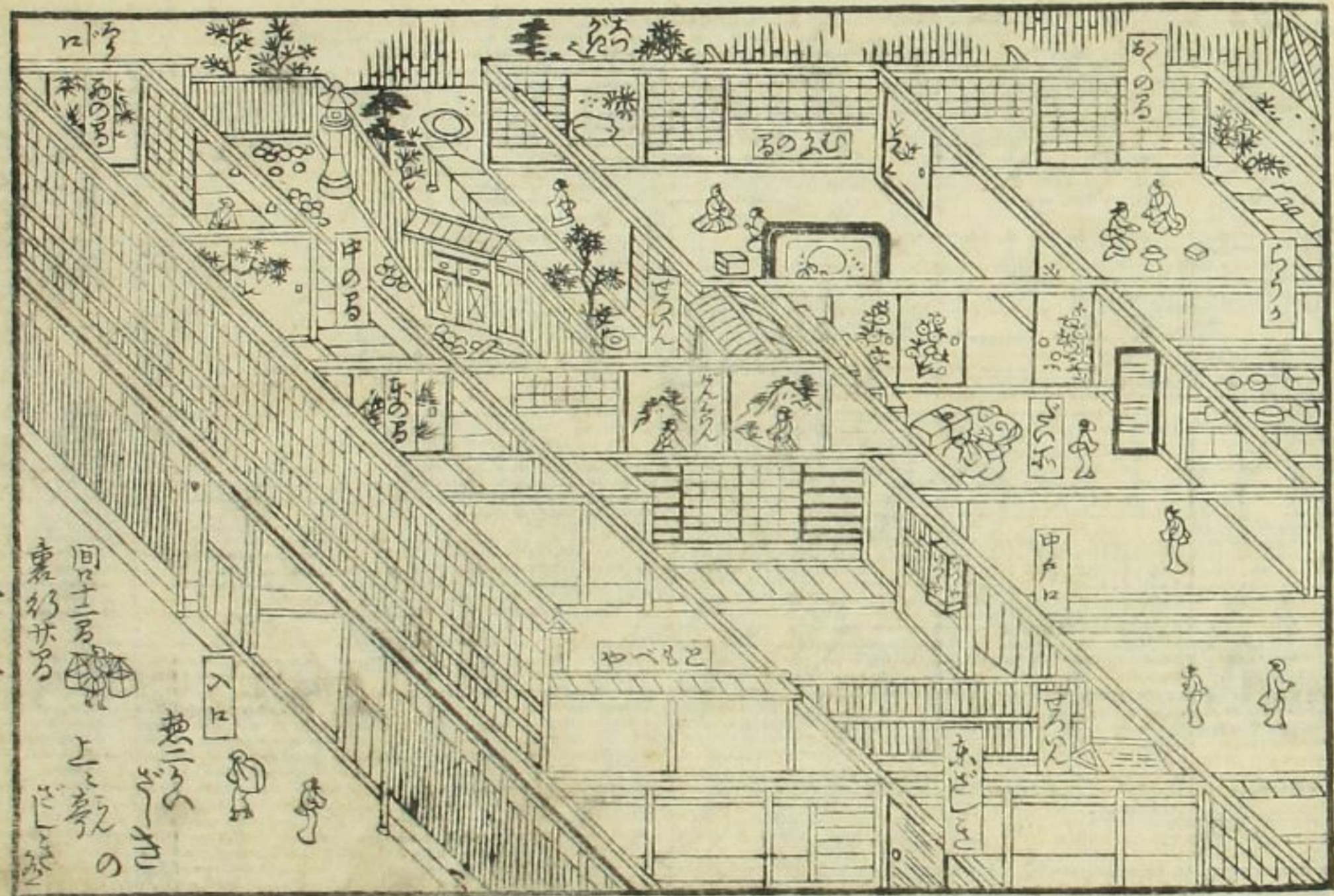
大和屋



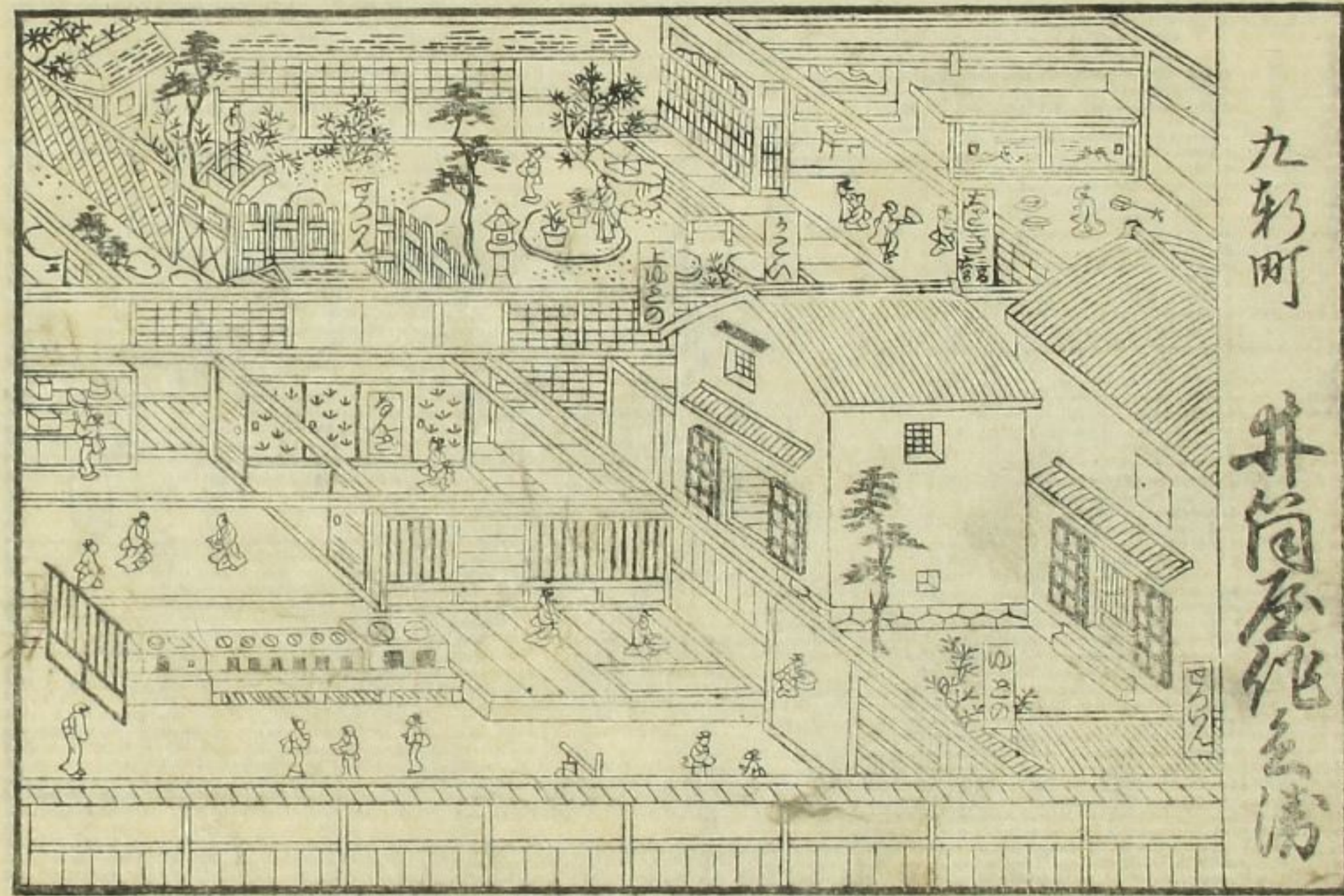




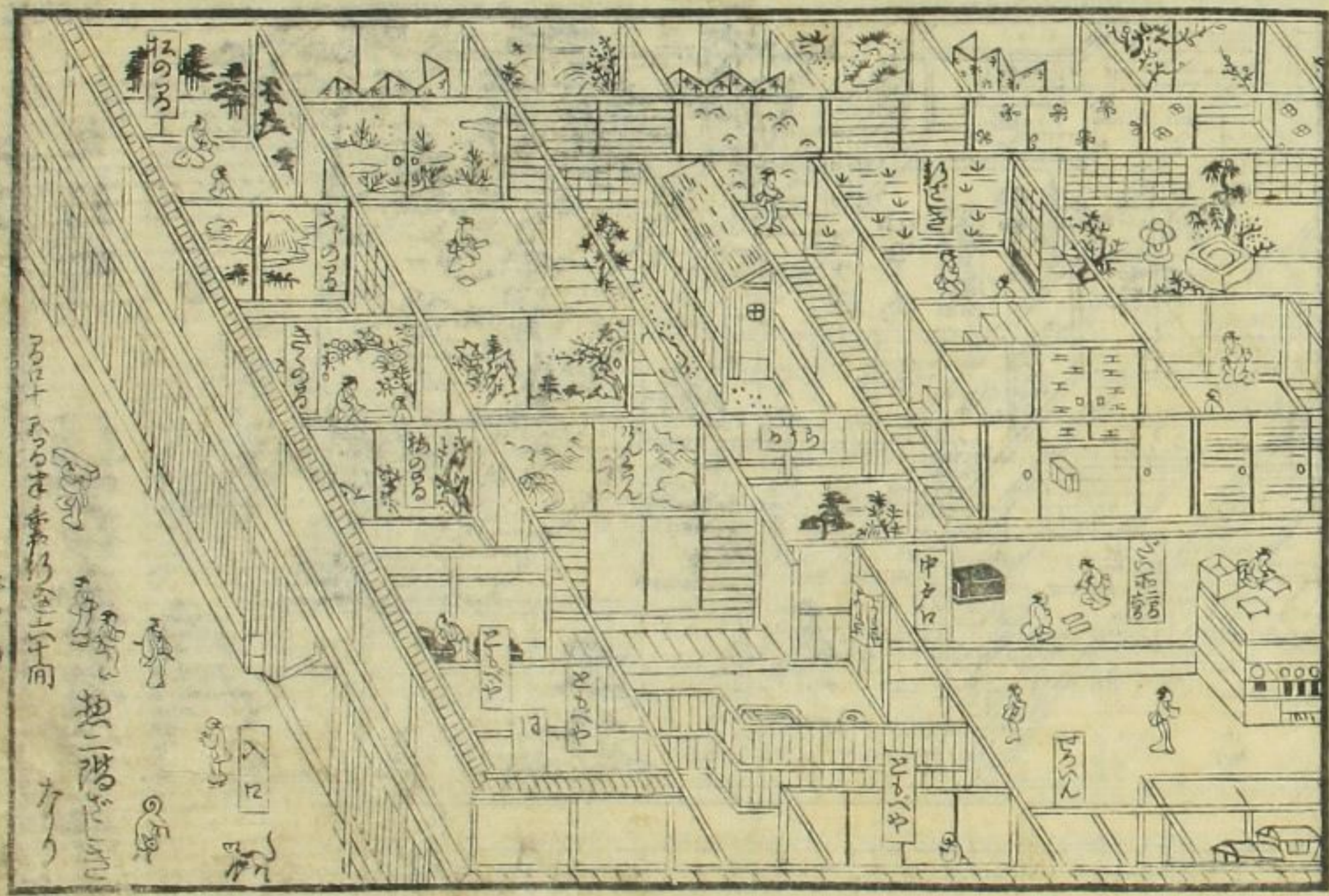
九軒町 扇屋才七



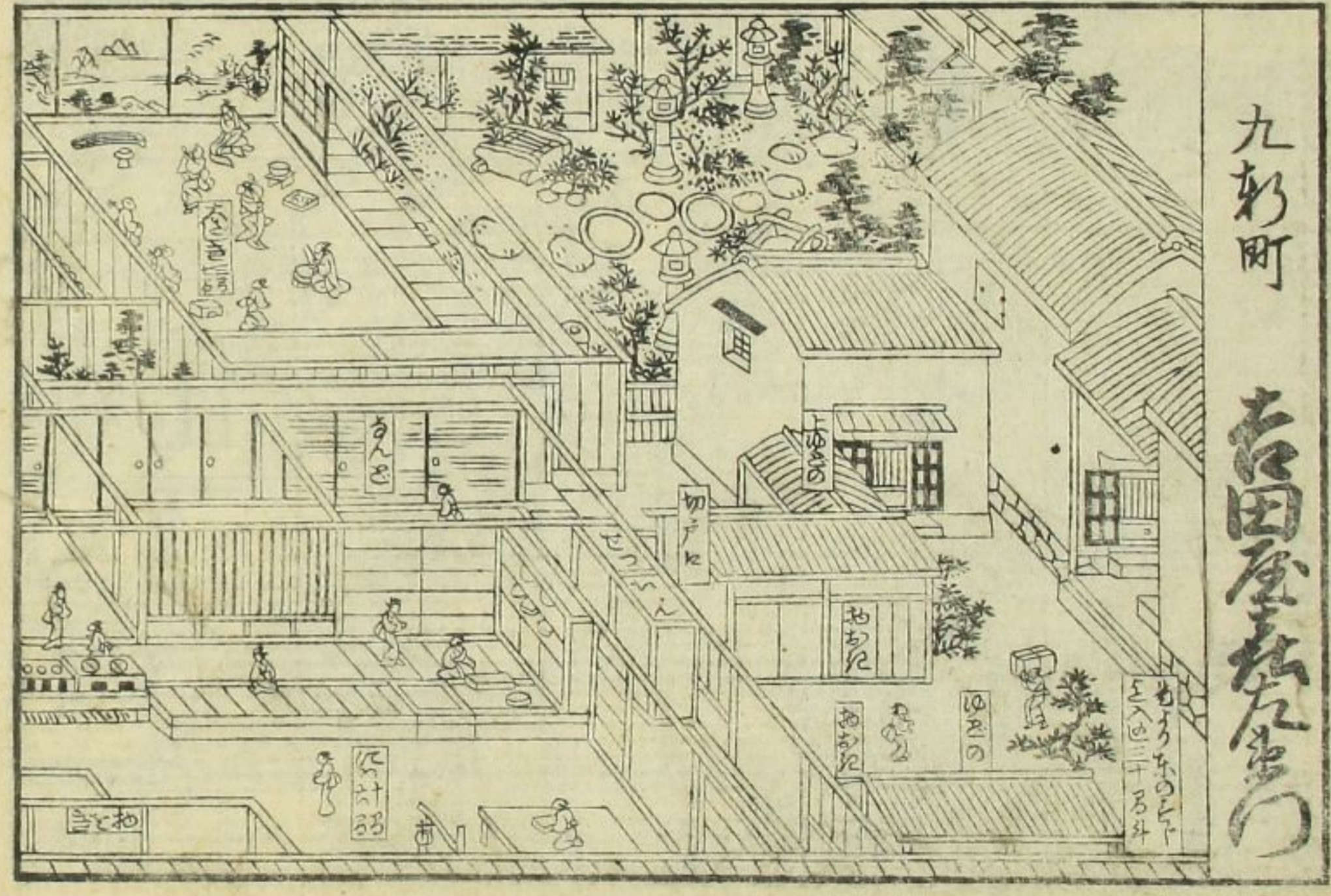
同士の  
 裏の  
 上  
 下  
 の  
 様子  
 の  
 様子  
 の  
 様子



九軒町  
 井筒屋



此の通りは  
 西へは  
 東へは  
 南へは  
 北へは



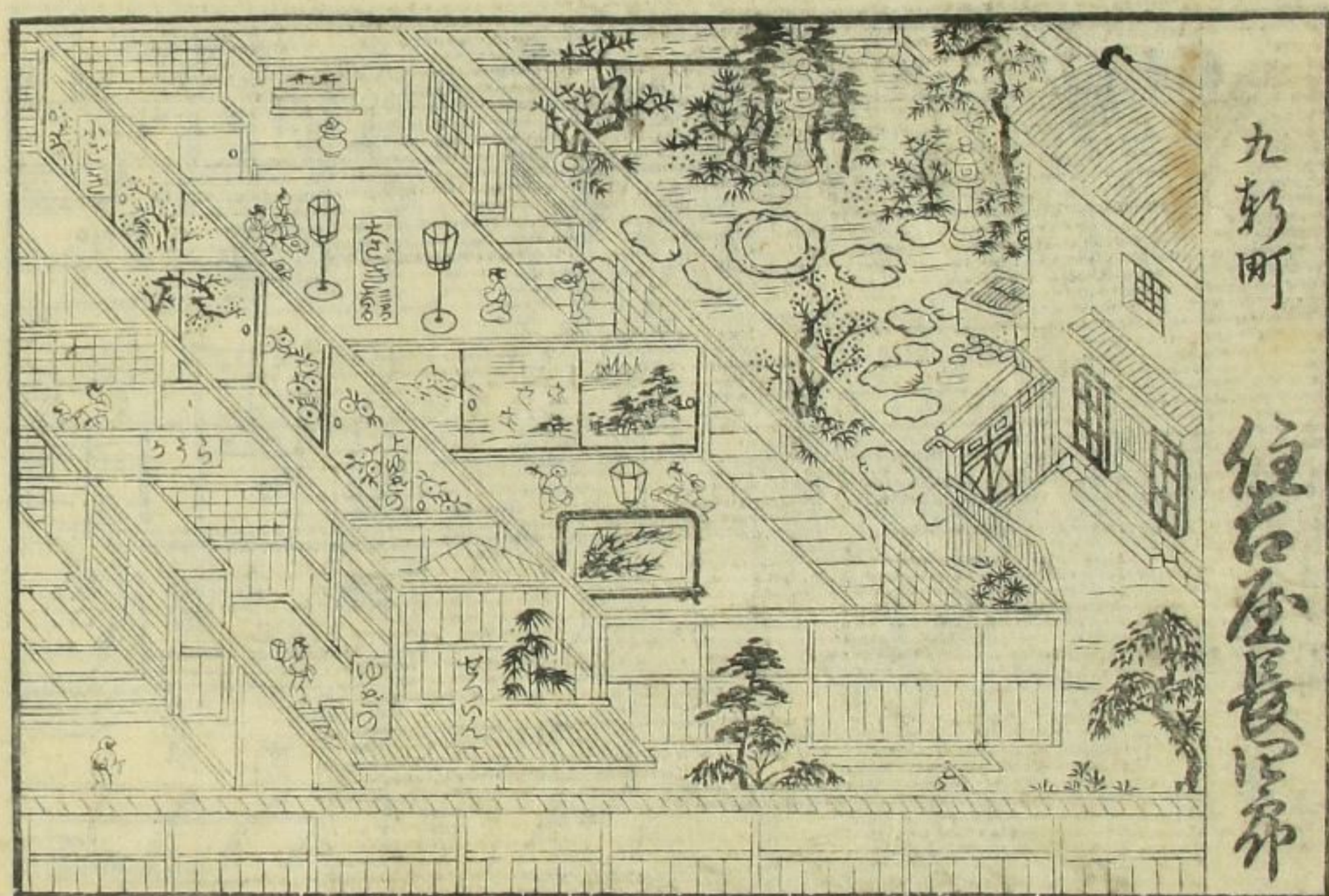
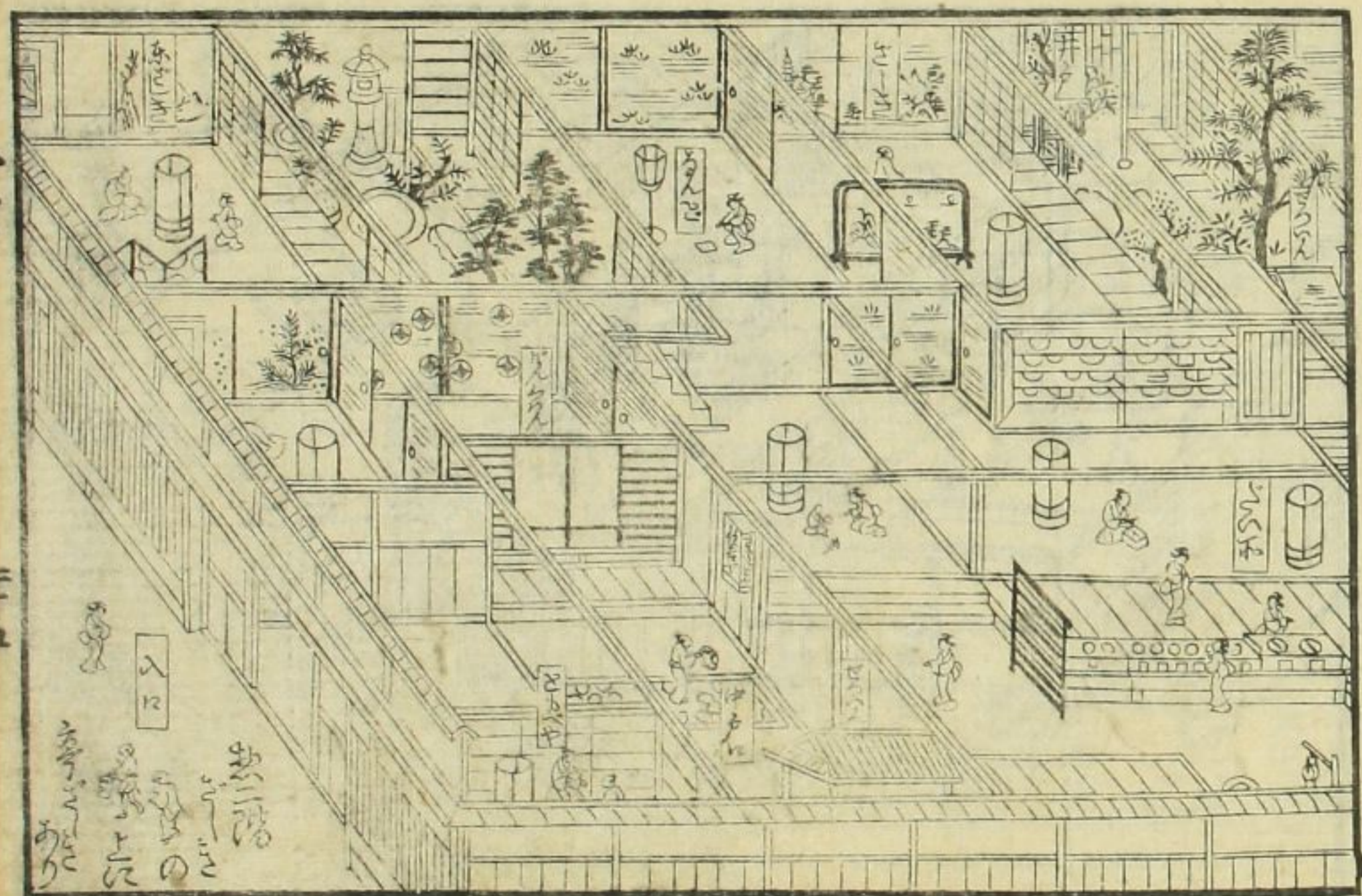
九折町

吉田屋敷左門

又

三

此より東の  
 門は三  
 十  
 八  
 尺

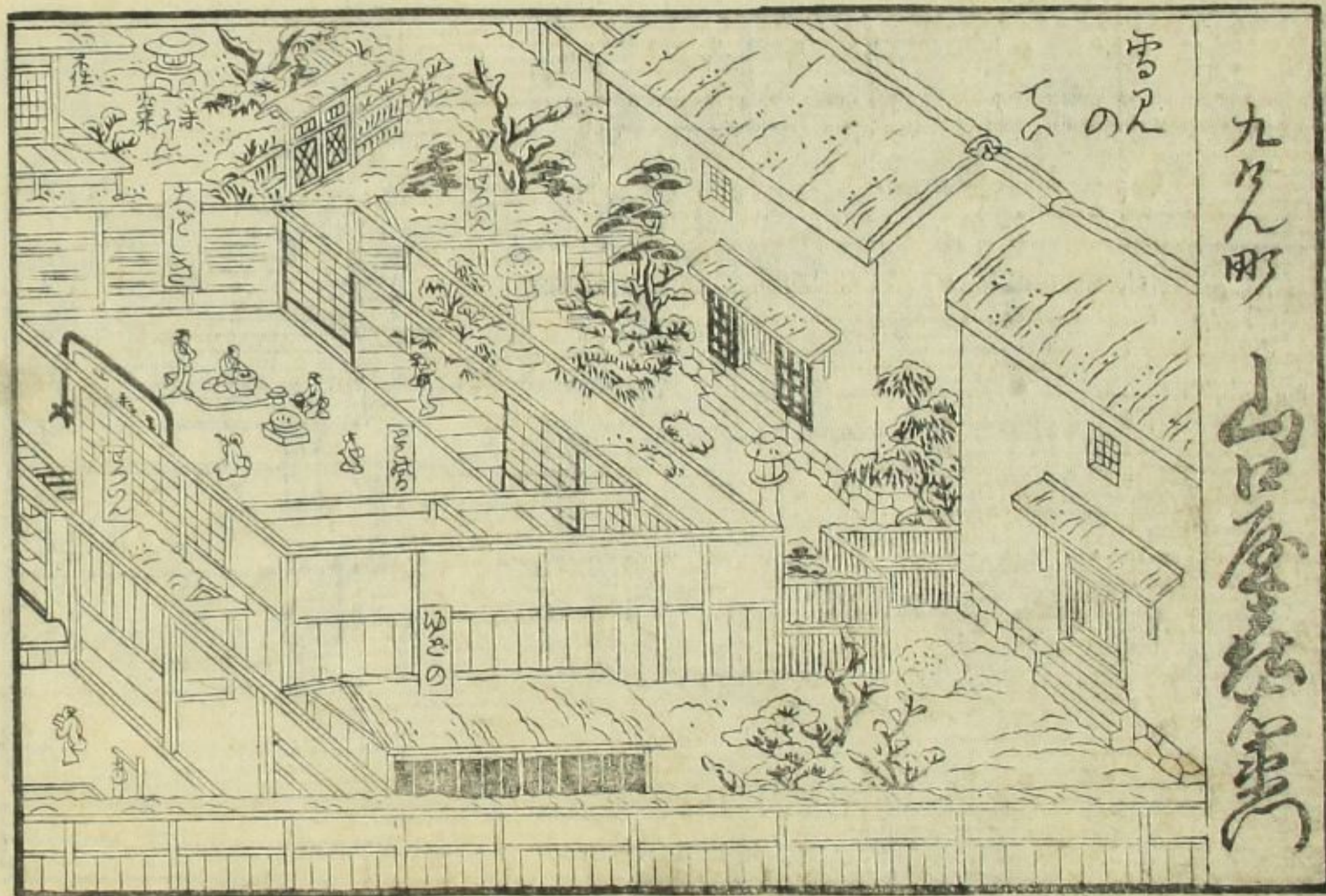
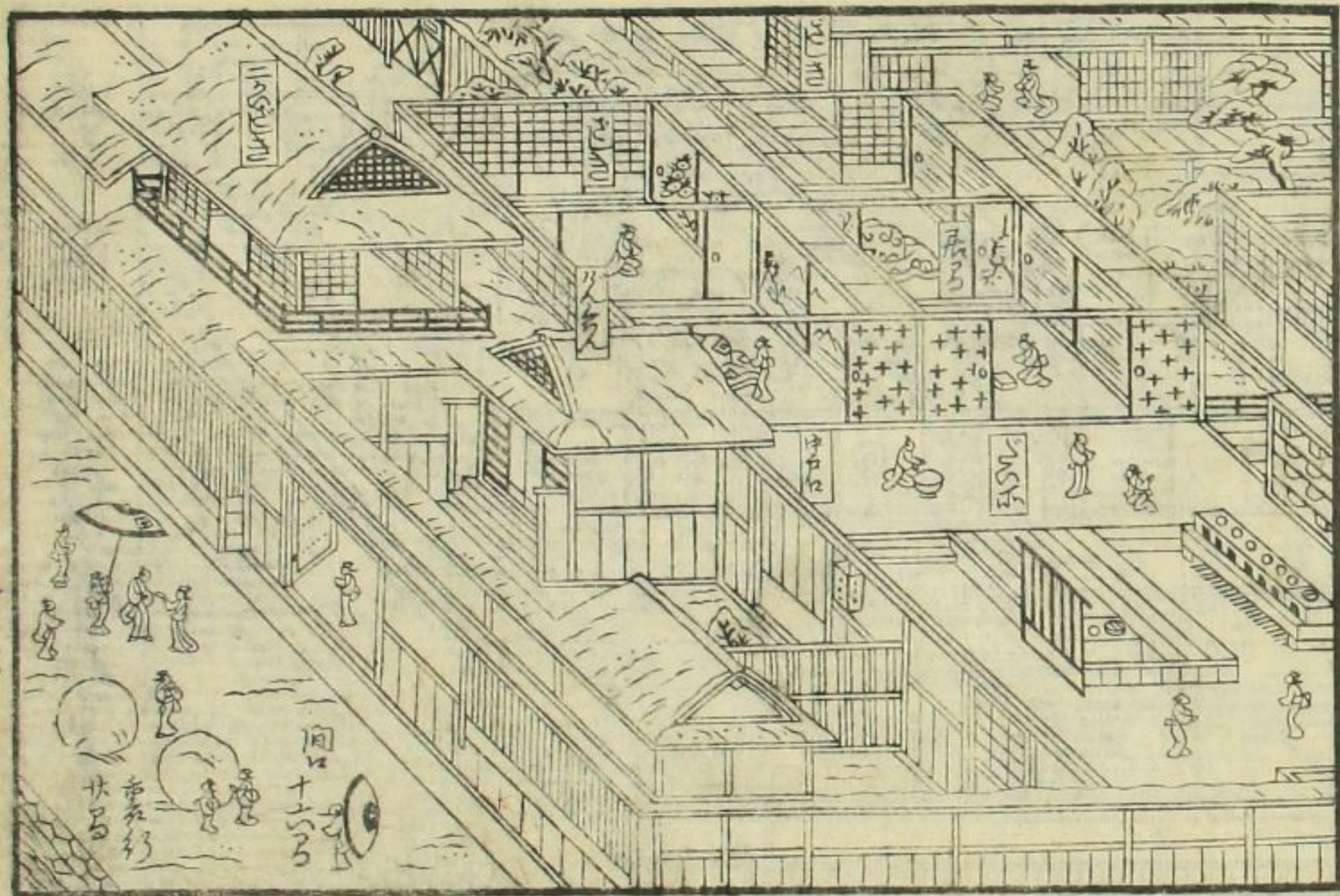


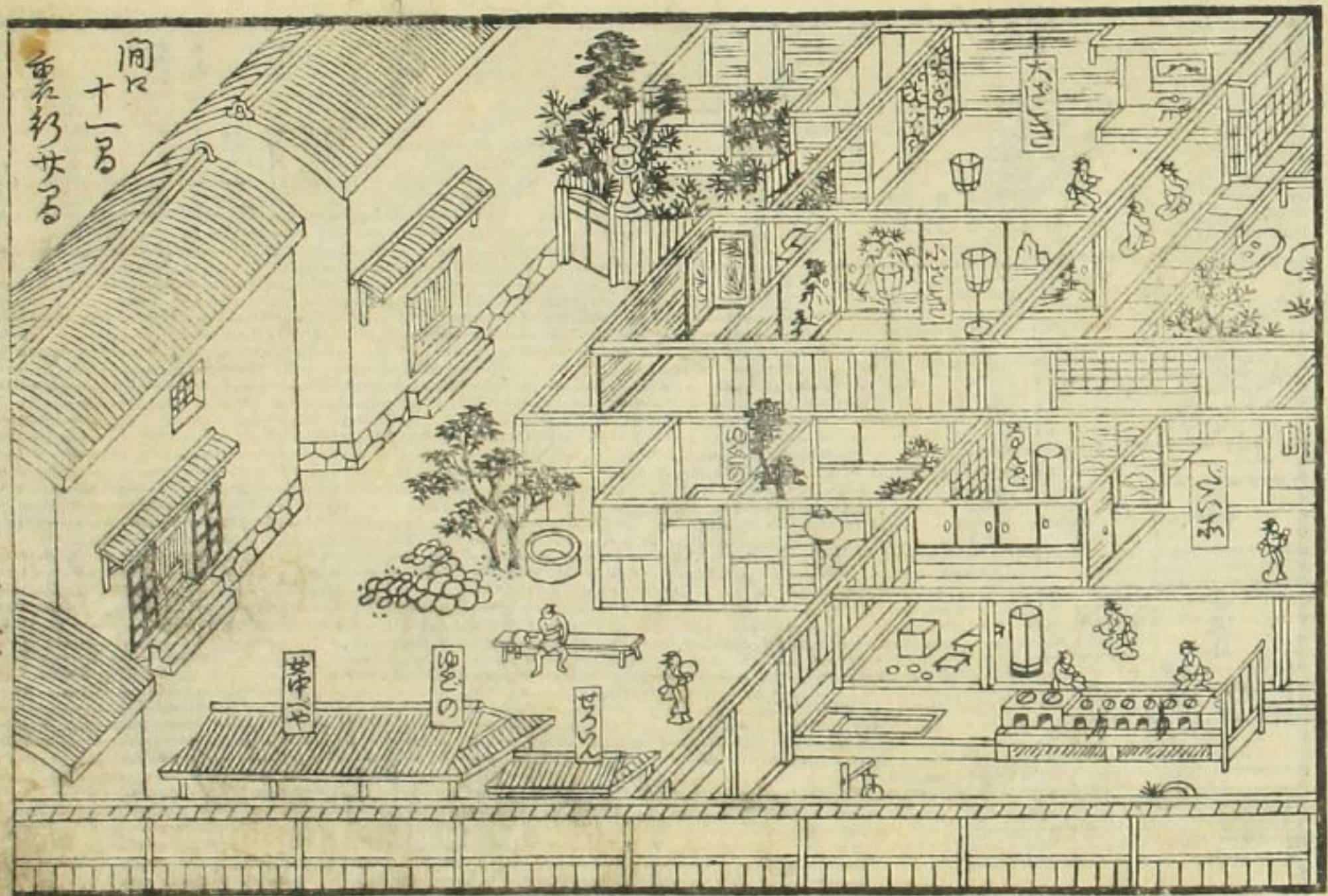
九軒町

徳右衛門長四郎

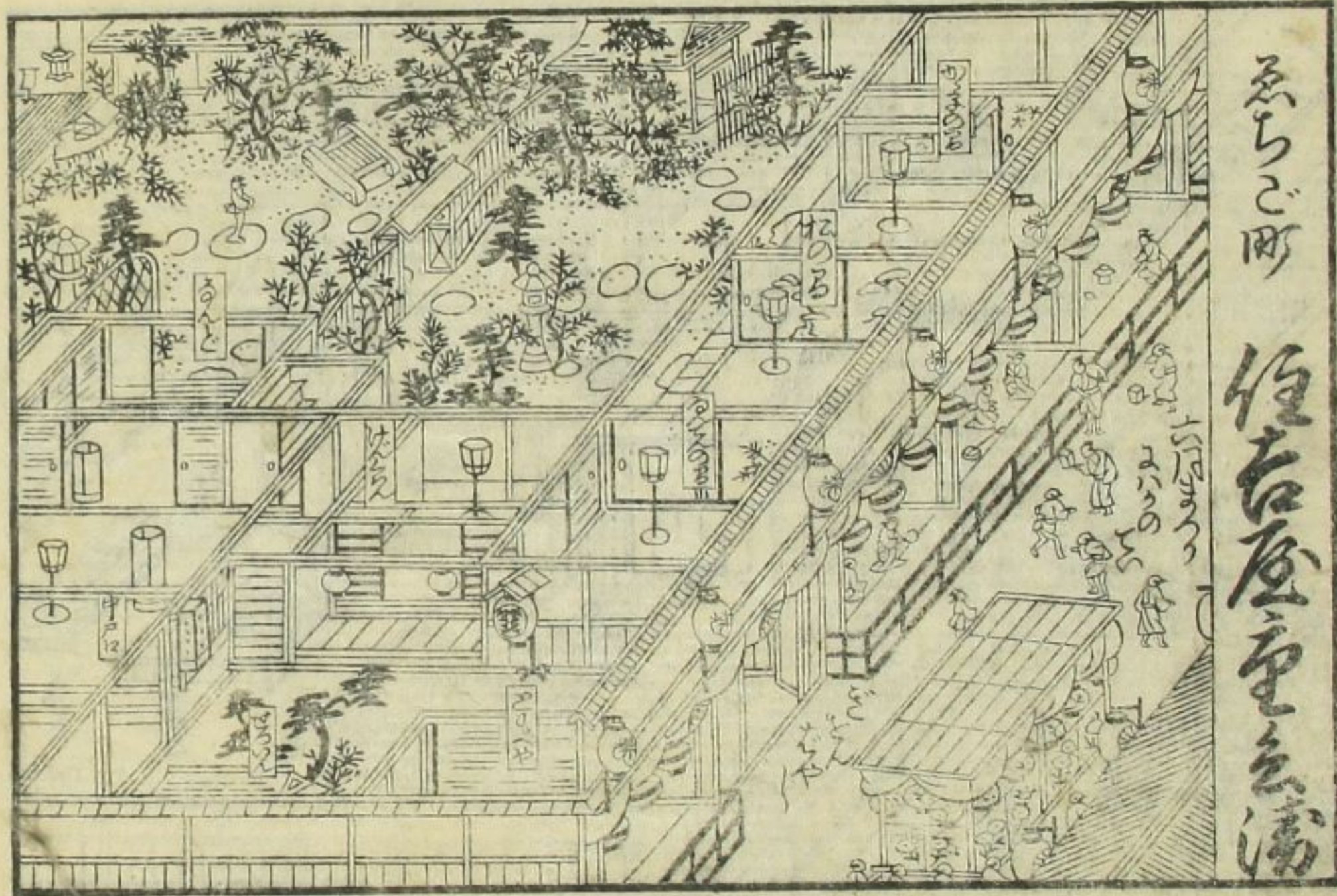
20

34





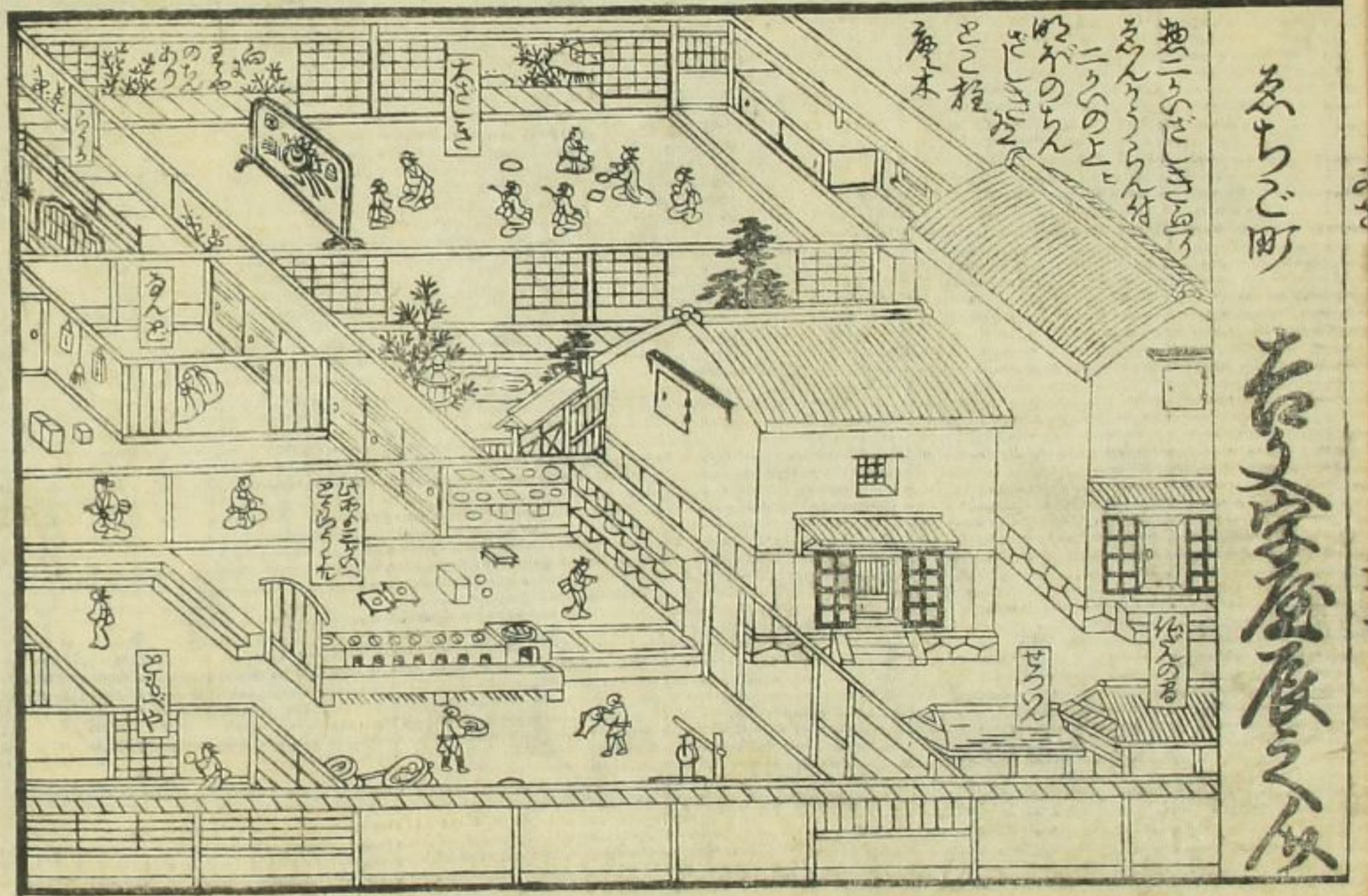
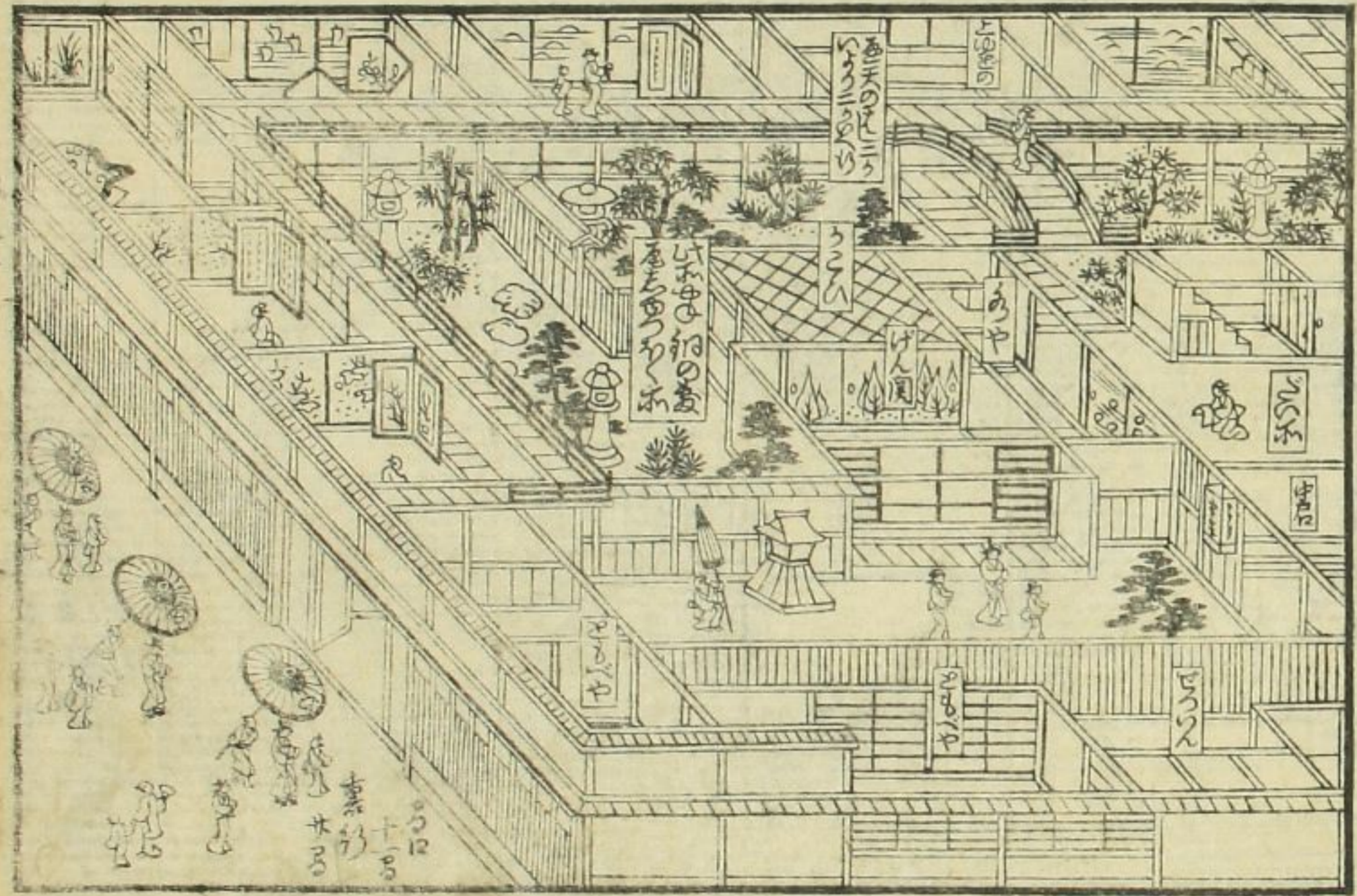
間  
十一  
重  
新  
女  
子



悉  
ら  
の  
所  
任  
古  
屋  
重  
之  
満

み  
ま  
り

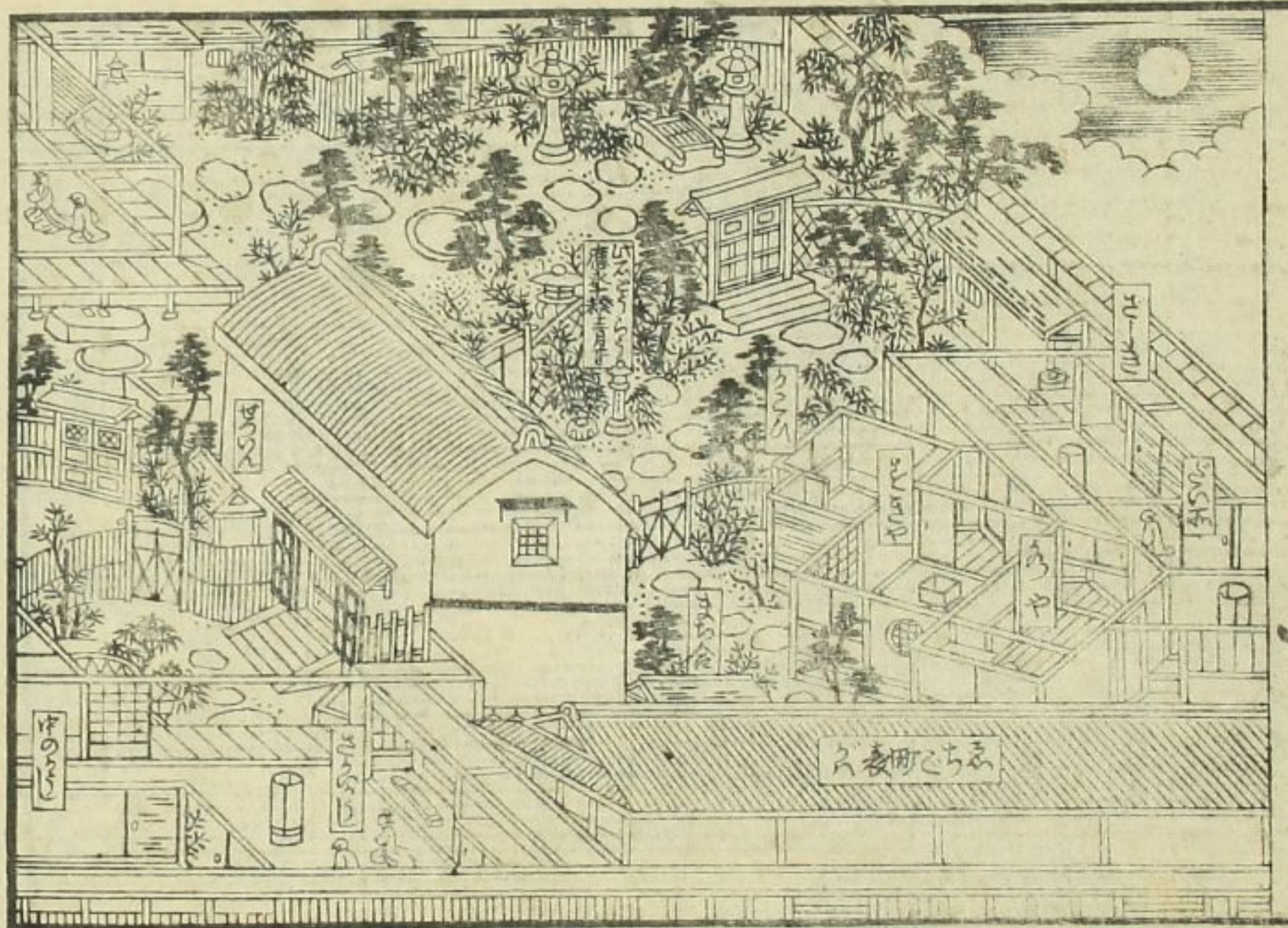
し  
ん  
じ  
ん



多しご町  
 寺屋敷之図

此の寺屋敷は  
 多しご町に  
 ありて  
 寺の  
 境内に  
 あり  
 此の  
 寺屋敷  
 には  
 寺の  
 境内  
 あり  
 此の  
 寺屋敷  
 には  
 寺の  
 境内  
 あり

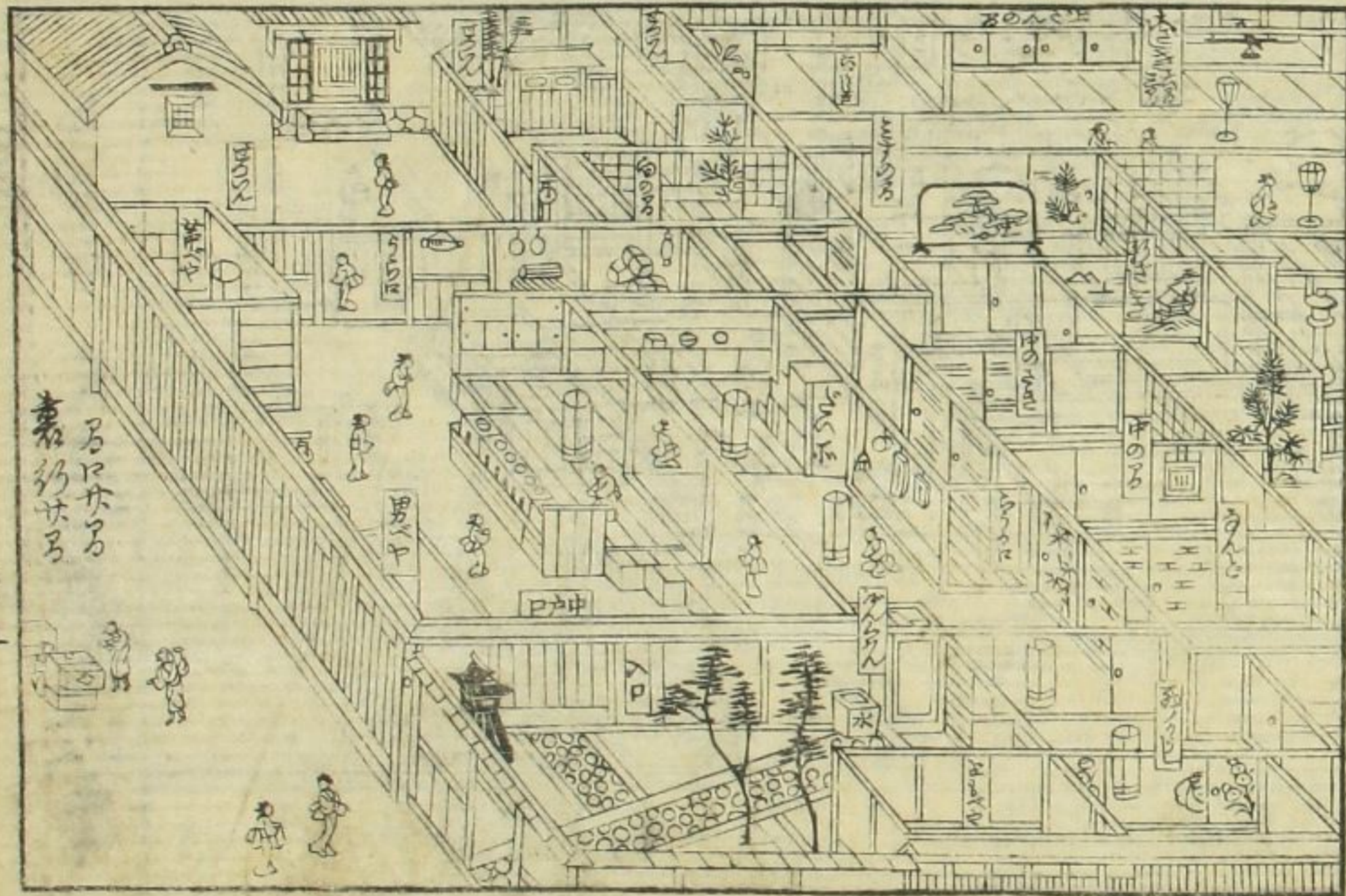
此の寺屋敷は  
 多しご町に  
 ありて  
 寺の  
 境内に  
 あり  
 此の  
 寺屋敷  
 には  
 寺の  
 境内  
 あり  
 此の  
 寺屋敷  
 には  
 寺の  
 境内  
 あり



まちの町

長町

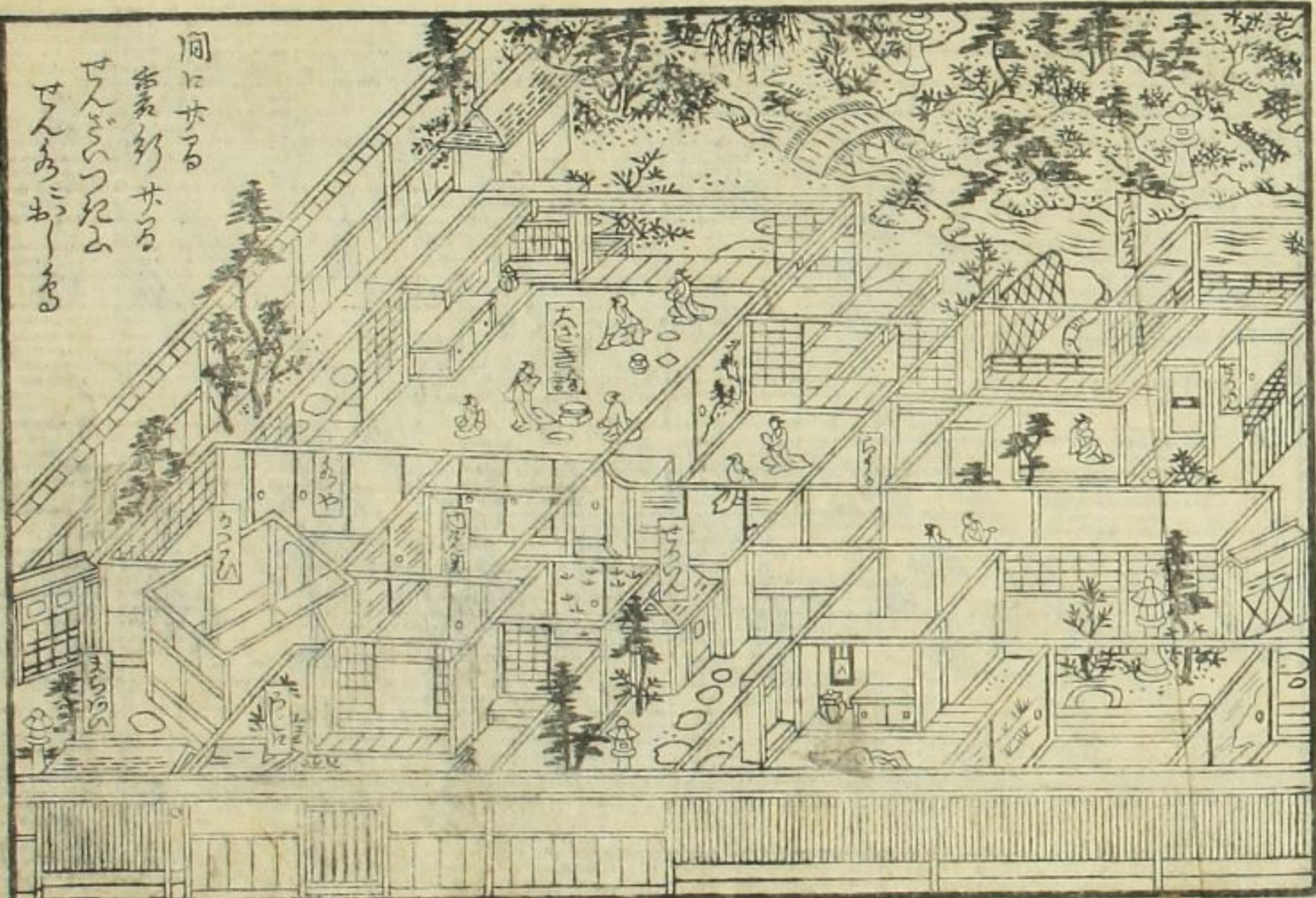
長町



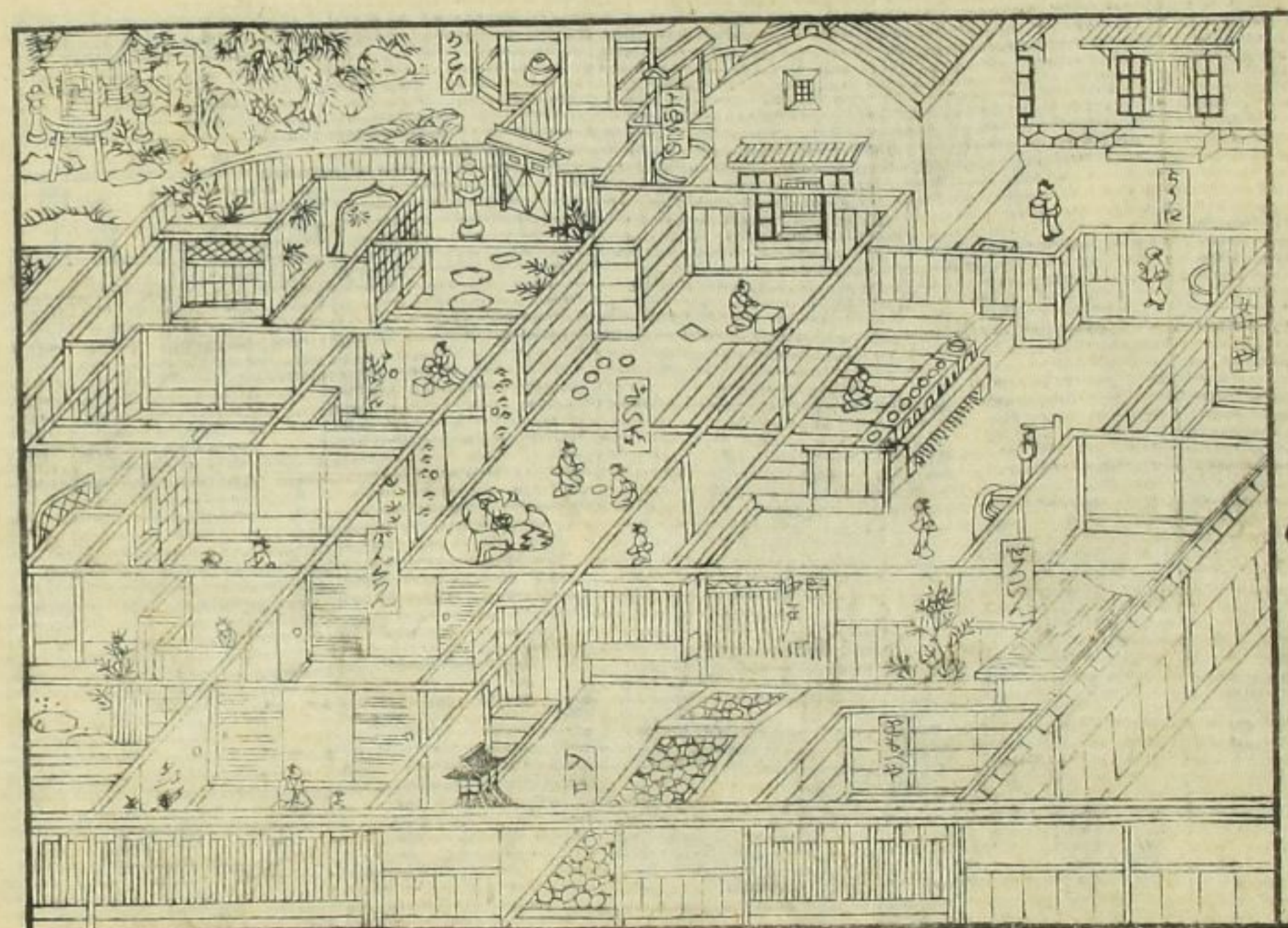
長町

長町



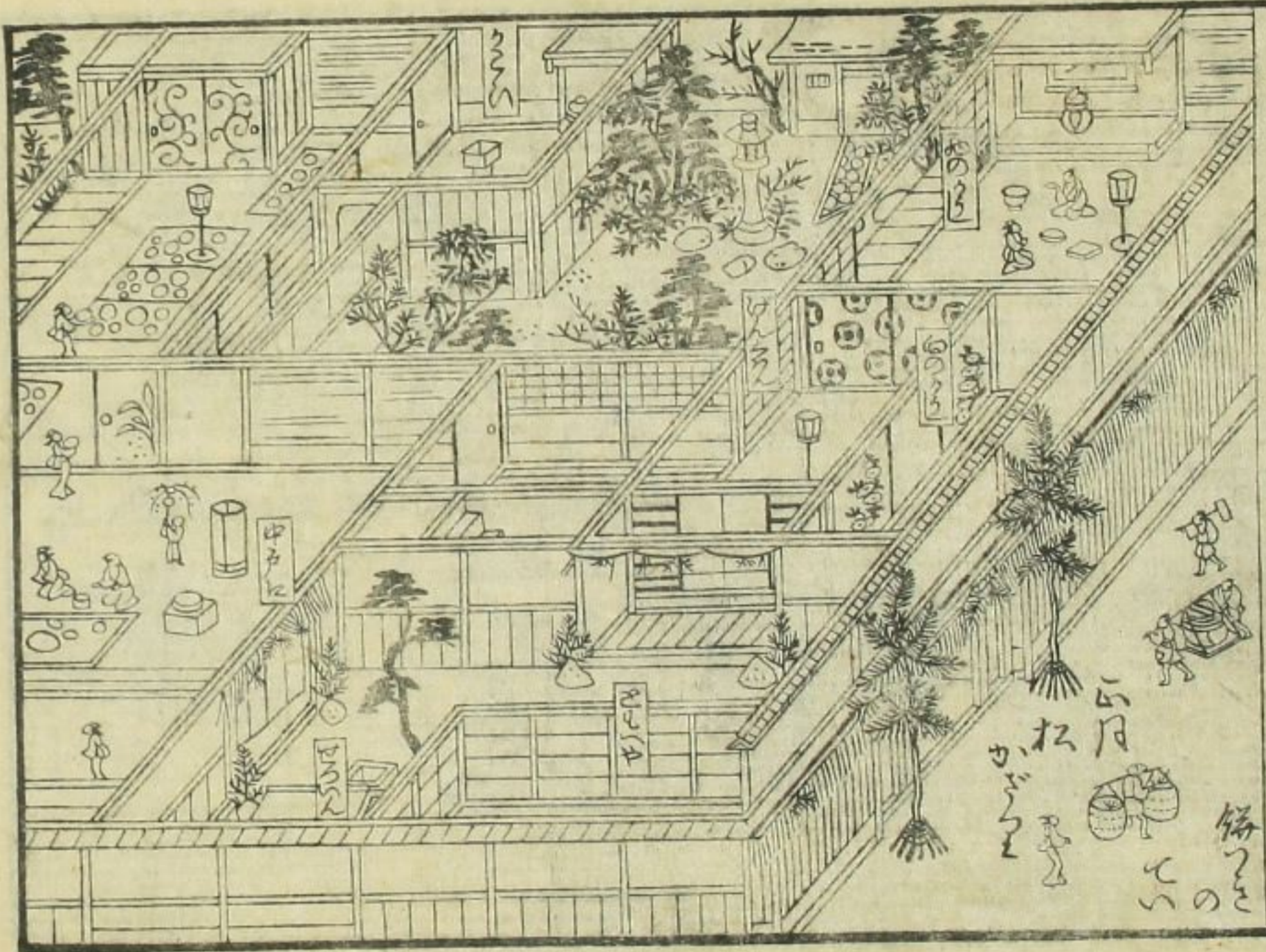
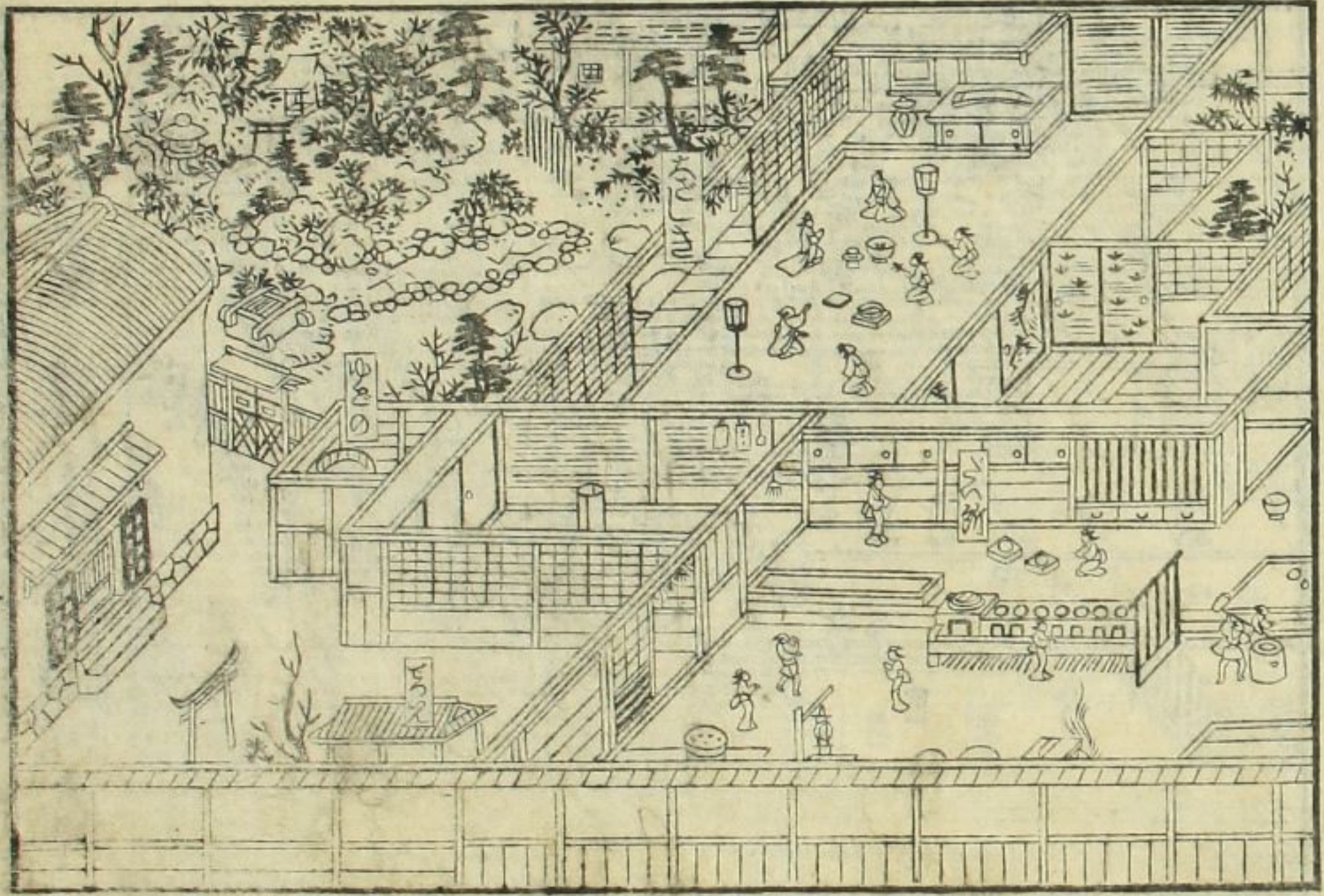


間に於る  
 番長は於る  
 町人といふは  
 町人といふは



町人といふは  
 町人といふは

町人といふは  
 町人といふは



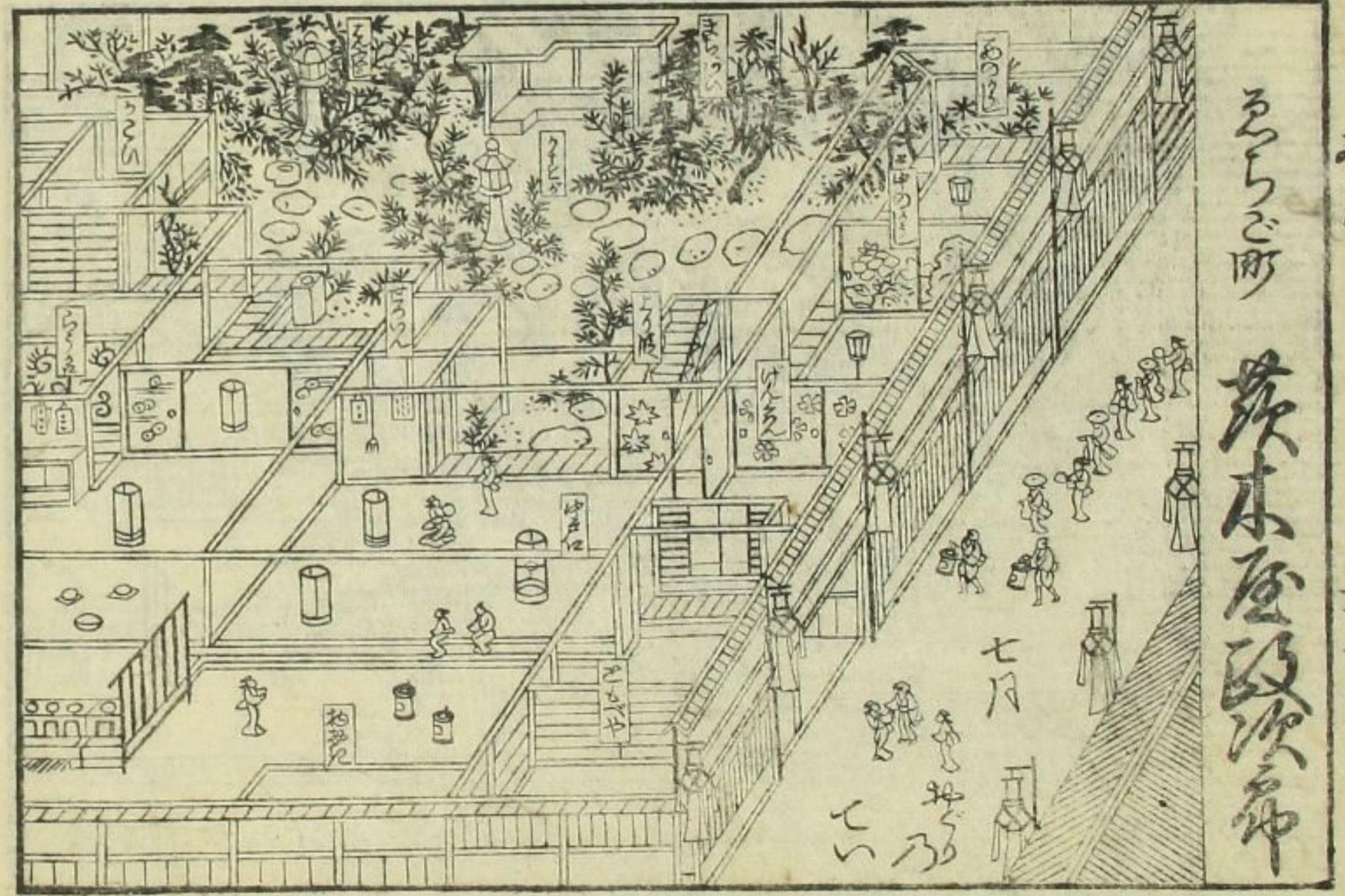
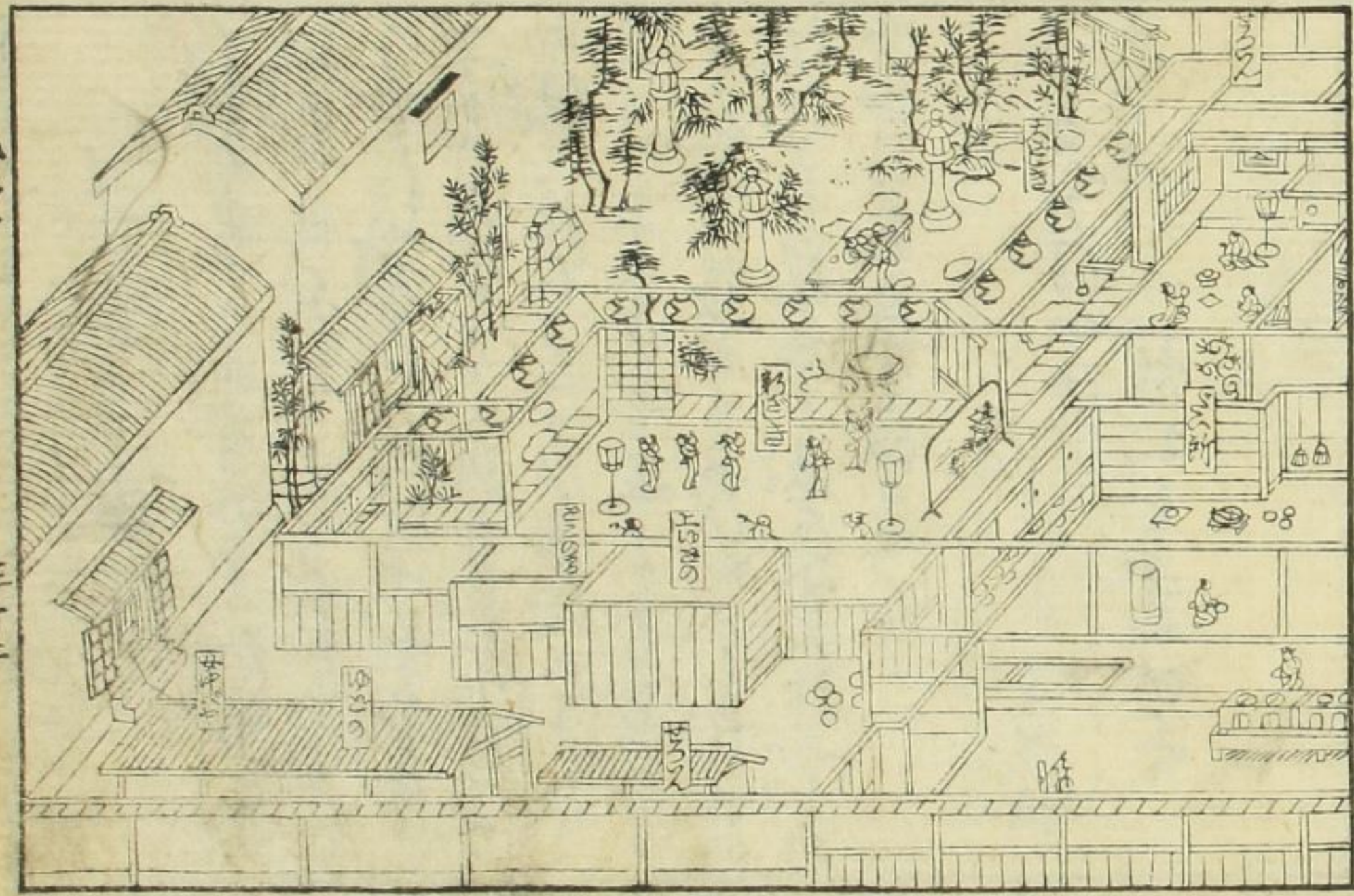
あつらふ町

河内屋敷と湯

松  
5月  
餅つき  
の  
ころ

みまこ

新町



あらしご所

炭木屋敷次郎

七月  
あらしご

○茶屋負数

茶屋唐土の通号の事初原  
細見一目子形といふ書ふりく  
のせうかい思を新町中茶屋と  
いふの趣合は十又形を乞師故え  
の抹く他而よろうひ南津の茶屋と  
いふの志大まゝの據りて有藤あり  
事他由の揚屋も及びがて一丸の  
作法を揚屋と遠ひ小天神以下の  
女師の茶屋もあり也

夕うほや餅く

教おと心念の完

とせ紙

○里詞空冊

吉田屋といふは揚屋二形と

・金六方と

揚の氣好といふ

・在る方と

中の氣好といふ

いふまき屋といふは揚屋二形と

・空席と席方と

とと町の氣好といふ

・又次席方と

新巻のまじといふ

たむいふまき表まうりつるまをさる

とみう屋二形と

・長世席方と

新すみのんといふ

・長世席方と

中すみのえといふ

いふは長世席西の方小住吉屋

のえといふは二る九軒町

・和吉方と

よとすみのえといふ

・京屋長なつちと云ふこといふ  
 又三羽屋といふ家何れもあはれも  
 ・三羽屋方と 東あきと云  
 ・江戸屋方と 西あきと云  
 いづれも風雅な屋敷と噂事  
 今山を私の言作る家名は  
 家名をゆく通用と云ふ事  
 のぞく風雅なる屋敷と云ふ事  
 もの也

○石史口口

并 ▲ 一夜毒の癖  
 ▲ 抱女解

抱女郎の口ふふ云ふ事  
 去るのと栞と和漢の通事  
 一月子軒よりく在る事  
 一抱女と一夜毒といふ事あり

古老の口を今もお通せし  
 此也又次のはは保俣といふ  
 抱女也

古百多分合

定家細長

一 依之と野上のものも抱  
 女といふ

といふ所を今も抱女郎といふ  
 依之を長明の海に記す  
 矢橋をまうくお後の名は  
 けるの抱女郎のうんをせま  
 たり引く榮實秋のうんを  
 たり自らと浦の女にけり  
 ありと云列吏の毒事  
 下累合  
 又園の下の名と云ふ色と

信氏之人を宿りてまゝに心算すべし  
若女いふとさあつくまをあらんれむ  
へしちと若の若るを張者の一夜の  
夏小むとび生涯のたれを僅運  
の法人の事ありて下署  
池田の若の持屋大坂の屋まを川の西菊  
たどりてはこれをは一夜事とて  
おのゆきききとくも今うか女といかり  
志るべきは若女といふかへの限女を  
あり唐土ゆく遊女とて若の若い  
日午おもありて

新古今持女恋 有友相伝

一 恥のうらまきもさたる若の若か  
うやむ若の祿もさありて  
とさゆゆる今候御祿をさとうしひ

舞々をいん都ハ水色ふしき云地  
故あり高津ハ水色自由あり所  
しとむの若女といつる若い今も  
川口若い小足若るまう若もむの  
持女といふは系作の志人もなく只  
情をいふのさく一口小論いぐト  
寛文入の中ハ高津の願持昌成さん  
しと若るま女若もまはさるいん  
げにおまふ法を専らげとる  
こそ若人の撰おれし能治の集  
おも若新たまの奈句あてんさ  
たよまうと

児の親のまをいぬしき

秋の子粒のあはれ  
掃さるる力あはれ

書きたるは見えはまじし致懐か

後

まじしはまじし

今も

あま

牡若いつらんこそそはさつ

まじ

か雨やいしくお雨と懐い

世の事

ゆら

柳まけまきのこころはさつ

まけまきをを君と今もあはれはさつ  
何れも風雅なるまのこころをさつ  
まへはさつと南洋のまをさつといはれ  
まのこころいさへへのまをさつ  
おらさつとまのこころはさつ柳まけまきあり

天神りり下傘いさかけもまをさつ  
張り通又いさへは引おはれはさつ  
あはれ

▲夕方の事 兼舟初夜

初柳町を許合をれ一原之部はつ  
といはれ浪人の東海原の四世部屋  
の長とあり今もまをさつおはれはさつ  
まのこころはさつ今一人の林又市部と  
いはれ人まの同部はさつとまをさつ  
とまをさつ今年中よりおはれはさつ  
三羽屋世部を傳といはれ日不格段屋  
まをさつといはれこの部屋とまをさつ  
ありと大坂へ引越さつはあまをさつ  
この部屋とまをさつはあまをさつ  
あつ故おまをさつ一原小大坂へ引越さつ





源氏和歌  
山里のあまのこをまはるはふままり  
立おんりもちた少地  
今羽屋世傳三郎二代目をあつぎや  
三郎世傳と云ふはりしに  
今羽屋源七郎世傳三郎友家  
也

源氏和歌  
山里のあまのこをまはるはふままり  
立おんりもちた少地  
今羽屋世傳三郎二代目をあつぎや  
三郎世傳と云ふはりしに  
今羽屋源七郎世傳三郎友家  
也

源氏和歌  
山里のあまのこをまはるはふままり  
立おんりもちた少地  
今羽屋世傳三郎二代目をあつぎや  
三郎世傳と云ふはりしに  
今羽屋源七郎世傳三郎友家  
也

源氏和歌  
山里のあまのこをまはるはふままり  
立おんりもちた少地  
今羽屋世傳三郎二代目をあつぎや  
三郎世傳と云ふはりしに  
今羽屋源七郎世傳三郎友家  
也

源氏和歌  
山里のあまのこをまはるはふままり  
立おんりもちた少地  
今羽屋世傳三郎二代目をあつぎや  
三郎世傳と云ふはりしに  
今羽屋源七郎世傳三郎友家  
也

夏跡の二月と云ふ事記して別後居  
 仔細なる後十郎と云くけい世實の  
 相とて入るやうなりは年小の  
 夕若相と云ふ夜かし翌年正月  
 二月よりある夕若一周年と云ふ相と云  
 とあり一二年忘又七年忘十三回忘  
 十七回忘と云く返しく英室古  
 年年より故田後十郎死去也し  
 室永六世年と云ふ夕若在言を  
 十八夜出たりと云くく人當りて  
 ありしとぞ是金く夕若が感懐  
 と後十郎の妙なる事しけ事委の  
 取巻集子知り

此塚の柙ぶくも

あはれあり

夕若の墓よりふ 存丹 鬼貫

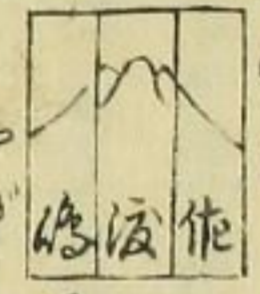
▲紙中の事

延宝年中本村屋又次郎抱紙中  
 こころ大文と云ふ名色つとふか  
 けたまれた中の所の上郎中たわ乃  
 こんどお押も公からまててうらま小  
 りあどく急の揚屋入いりたより  
 ありたも柙をかあく通り  
 柙より名をぬきし程のうへ又ある所  
 あげやうくおお方の名色は  
 へんしとて下常あくるんがて  
 けんとて一時は見たりしを俄に  
 おりし竹湯具のおらりめん三布  
 をこきえらるしは細付てあて  
 たりけ風を紙中禪といふ紙中  
 禪紙中因うり路りしはなきあり

信説より珠玉其附の大臣はとらじ  
の信説は其の親樂もかゝるまゝと  
推しやち其外は古まふはき  
きあく名の所りら因縁わ似も  
る難きゆへあつても思ふに

▲あぢまの事

佐後守子之屋高の家代は愛媛一  
作かくのぶく一画あり一人よ  
修治 誰がゆい初一や終は氣主屋  
とら家号ふゆびく也去る信も所まで  
ハ佐後守子之屋高の家代は愛媛一  
實ん夫奉中は家の抱ふ吾妻あし  
いつる古まありと 紙中夕暮りあも  
あぶかんの金盛世とあり一思ふ  
すぐれ天性位と其と系行一通り



子及をばるる系不通に法は親家  
祇一とまゆゆ事と多し其申小務及  
山本村小坂とふたふあといふは法人  
ありらあるこまは津のありあぢま  
の石まきたらぬ九折所井筒屋  
ち居るらが方ありけあぢまあふと  
わらくを遊初一より三夜是とあふ  
とめそねらり初夜とくこの揚指の  
あそび井筒屋の月夜を建並し  
やんたりけ大屋ふたふ定致之の柏  
してまらるよりち居るら月夜あ  
計がく一初はど柏のうらおを折一  
くろ法攝の家造年子も及びびに  
け井筒屋を命とつとつ揚を井筒子  
ひあ終をて今いなりとふたつ建立  
のぎも終まあ上の泡と御せたり

大江山村と云ふを世に山崎と云ふ  
とぞひかたより其地もゆゑありて  
ありしやあはれなりあはれなりを  
山崎と云ふゆゑにせしむるは山崎  
そのこと信じて三百あるといふなり  
其は女帝の身の代三百あるといふ  
ゆゑにせしむるや今も千金の價あり  
もすしゆかりしはあはれなりと氏子  
かたより後世にたゞ画に賛する  
まはれなり

身のあはれをいふや  
くたはあはれ

山本の里

と奉付たりあり今も松津山崎  
山本村某小作の二軒傳事と云

山門松  
在所駕

あまのありしをいふを思ふを  
松山よかたより松久をえ日全歳越  
といふ山崎理文句小作りよりあり  
さはと云ふは山崎の夜殊小ま  
松板をいふは揚屋さきありて前  
より事なりといふ元禄年中大坂  
玉屋某と云ふ人誠後田へをま



定夜をさるし内子一夜具并料理紙首  
礼の事おのちおのちのおおしく入女  
拾りし揚屋へ女に座よりおをやり  
け長お付まらりもあつてありし  
事係九段の御焼し今之風  
爰小包く揚屋へ通つ也

○仕着紗粧

年二日忌 三日忌

正月 三月 又月  
六月 七月 九月

右仕着は家々の拾あし爰お器を  
お小二日忌三日忌おびりあり  
是ハ十里の一風流し家方より  
はるばる衣お装の絡繰いおきい

引手輪ゆきり一日忌と三日忌  
ハ親方方の仕着は式日也四日忌  
物も二日目日ト衣お装もくおも  
見えたりと二日目の衣お装も  
それハ仕着は客方よりお装の衣お装  
トお装二日者トはお装トこれ  
全盛の女席の花と

○身請門出

於御定り門かの日揚屋茶屋親  
の親親おのちの揚屋へおをやり  
縁織お等お係は縁織とを又  
まらりし方よりおをやりし  
まらりし後門か右おとく家内一  
一家あはれまらり料理小法操を  
はくし不並りおとく揚屋より平小



来る事お扱せ事もおからまひ  
樂被<sup>たが</sup>すげ<sup>たが</sup>さ<sup>たが</sup>あ<sup>たが</sup>り<sup>たが</sup>夫<sup>たが</sup>も  
揚座<sup>たが</sup>もく又<sup>たが</sup>不<sup>たが</sup>幸<sup>たが</sup>も<sup>たが</sup>此<sup>たが</sup>時<sup>たが</sup>に<sup>たが</sup>この  
女<sup>たが</sup>神<sup>たが</sup>を<sup>たが</sup>お<sup>たが</sup>し<sup>たが</sup>く<sup>たが</sup>あ<sup>たが</sup>は<sup>たが</sup>ま<sup>たが</sup>る<sup>たが</sup>目<sup>たが</sup>ん<sup>たが</sup>送<sup>たが</sup>  
乃<sup>たが</sup>多<sup>たが</sup>も<sup>たが</sup>あ<sup>たが</sup>ま<sup>たが</sup>り<sup>たが</sup>ま<sup>たが</sup>ぐ<sup>たが</sup>張<sup>たが</sup>り<sup>たが</sup>く<sup>たが</sup>見<sup>たが</sup>  
そ<sup>たが</sup>ら<sup>たが</sup>も<sup>たが</sup>や<sup>たが</sup>り<sup>たが</sup>り<sup>たが</sup>幸<sup>たが</sup>も<sup>たが</sup>も<sup>たが</sup>多<sup>たが</sup>し<sup>たが</sup>  
け<sup>たが</sup>義<sup>たが</sup>武<sup>たが</sup>の<sup>たが</sup>大<sup>たが</sup>臣<sup>たが</sup>の<sup>たが</sup>威<sup>たが</sup>勢<sup>たが</sup>を<sup>たが</sup>身<sup>たが</sup>に<sup>たが</sup>て<sup>たが</sup>花<sup>たが</sup>  
英<sup>たが</sup>か<sup>たが</sup>ぎ<sup>たが</sup>り<sup>たが</sup>ふ<sup>たが</sup>り<sup>たが</sup>

○天神位階

并小天神  
見世天神

け<sup>たが</sup>天神<sup>たが</sup>とい<sup>たが</sup>つ<sup>たが</sup>織<sup>たが</sup>も<sup>たが</sup>能<sup>たが</sup>く<sup>たが</sup>詠<sup>たが</sup>あり<sup>たが</sup>  
先<sup>たが</sup>天神<sup>たが</sup>と<sup>たが</sup>詠<sup>たが</sup>い<sup>たが</sup>つ<sup>たが</sup>り<sup>たが</sup>大<sup>たが</sup>天神<sup>たが</sup>あり<sup>たが</sup>  
左<sup>たが</sup>夫<sup>たが</sup>女<sup>たが</sup>片<sup>たが</sup>い<sup>たが</sup>と<sup>たが</sup>揚<sup>たが</sup>座<sup>たが</sup>中<sup>たが</sup>物<sup>たが</sup>と<sup>たが</sup>茶<sup>たが</sup>座<sup>たが</sup>  
へ<sup>たが</sup>い<sup>たが</sup>物<sup>たが</sup>と<sup>たが</sup>位<sup>たが</sup>の<sup>たが</sup>内<sup>たが</sup>少<sup>たが</sup>婦<sup>たが</sup>小<sup>たが</sup>天神<sup>たが</sup>と<sup>たが</sup>  
い<sup>たが</sup>ふ<sup>たが</sup>を<sup>たが</sup>價<sup>たが</sup>も<sup>たが</sup>少<sup>たが</sup>く<sup>たが</sup>し<sup>たが</sup>也<sup>たが</sup>あ<sup>たが</sup>く<sup>たが</sup>ま<sup>たが</sup>り<sup>たが</sup>も

半<sup>たが</sup>夜<sup>たが</sup>とい<sup>たが</sup>ふ<sup>たが</sup>も<sup>たが</sup>切<sup>たが</sup>く<sup>たが</sup>物<sup>たが</sup>居<sup>たが</sup>その<sup>たが</sup>乃<sup>たが</sup>子<sup>たが</sup>  
見<sup>たが</sup>世<sup>たが</sup>天神<sup>たが</sup>と<sup>たが</sup>之<sup>たが</sup>居<sup>たが</sup>も<sup>たが</sup>い<sup>たが</sup>づ<sup>たが</sup>れ<sup>たが</sup>も<sup>たが</sup>價<sup>たが</sup>い<sup>たが</sup>  
奥<sup>たが</sup>小<sup>たが</sup>妻<sup>たが</sup>一<sup>たが</sup>天神<sup>たが</sup>由<sup>たが</sup>之<sup>たが</sup>居<sup>たが</sup>あ<sup>たが</sup>居<sup>たが</sup>り<sup>たが</sup>  
高<sup>たが</sup>津<sup>たが</sup>の<sup>たが</sup>系<sup>たが</sup>瑞<sup>たが</sup>原<sup>たが</sup>と<sup>たが</sup>遠<sup>たが</sup>し<sup>たが</sup>天神<sup>たが</sup>藏<sup>たが</sup>小<sup>たが</sup>  
日<sup>たが</sup>人<sup>たが</sup>兼<sup>たが</sup>あ<sup>たが</sup>一<sup>たが</sup>雨<sup>たが</sup>天<sup>たが</sup>ち<sup>たが</sup>れ<sup>たが</sup>が<sup>たが</sup>天神<sup>たが</sup>も<sup>たが</sup>長<sup>たが</sup>板<sup>たが</sup>  
の<sup>たが</sup>か<sup>たが</sup>さ<sup>たが</sup>と<sup>たが</sup>さ<sup>たが</sup>か<sup>たが</sup>あ<sup>たが</sup>り<sup>たが</sup>も<sup>たが</sup>ま<sup>たが</sup>ま<sup>たが</sup>真<sup>たが</sup>保<sup>たが</sup>保<sup>たが</sup>の<sup>たが</sup>居<sup>たが</sup>  
新<sup>たが</sup>境<sup>たが</sup>以<sup>たが</sup>後<sup>たが</sup>居<sup>たが</sup>也<sup>たが</sup>と<sup>たが</sup>る<sup>たが</sup>所<sup>たが</sup>不<sup>たが</sup>妨<sup>たが</sup>大<sup>たが</sup>格<sup>たが</sup>子<sup>たが</sup>  
い<sup>たが</sup>物<sup>たが</sup>り<sup>たが</sup>も<sup>たが</sup>但<sup>たが</sup>小<sup>たが</sup>天神<sup>たが</sup>と<sup>たが</sup>ト<sup>たが</sup>居<sup>たが</sup>小<sup>たが</sup>を<sup>たが</sup>人<sup>たが</sup>  
も<sup>たが</sup>多<sup>たが</sup>も<sup>たが</sup>也<sup>たが</sup>と<sup>たが</sup>り<sup>たが</sup>く<sup>たが</sup>婦<sup>たが</sup>小<sup>たが</sup>天神<sup>たが</sup>と<sup>たが</sup>い<sup>たが</sup>ふ<sup>たが</sup>  
婿<sup>たが</sup>女<sup>たが</sup>即<sup>たが</sup>兼<sup>たが</sup>限<sup>たが</sup>也<sup>たが</sup>

多<sup>たが</sup>御<sup>たが</sup>の<sup>たが</sup>額<sup>たが</sup>の<sup>たが</sup>櫛<sup>たが</sup>や

宝<sup>たが</sup>晋<sup>たが</sup>齊<sup>たが</sup> 其<sup>たが</sup>角<sup>たが</sup>

之<sup>たが</sup>下<sup>たが</sup>の<sup>たが</sup>月<sup>たが</sup>

○鹿子位階

并新  
新

之<sup>たが</sup>の<sup>たが</sup>津<sup>たが</sup>を<sup>たが</sup>い<sup>たが</sup>麻<sup>たが</sup>衣<sup>たが</sup>と<sup>たが</sup>い<sup>たが</sup>書<sup>たが</sup>と<sup>たが</sup>記<sup>たが</sup>と<sup>たが</sup>い<sup>たが</sup>遠<sup>たが</sup>い



かへし瑞と曰神歌、其中よ  
君別を位よとて死あらし  
法かま初書ふまゝく麻衣をひの  
摺子女師の目やく婿女師と摺式  
うゝ高取のちゝ小天神もあつた  
かゝしい又引子とかく混雜し  
まゝゝ高津の引子今あてい  
同摺あり又あつたりけ位のち小  
月の位新の位許の位と法あり  
價のちとあつづきの由縁ありけ位  
物さふとあつた月二つ新二つ  
二つ許といふ松風の楓あり葉  
あゝとらまゝなるを居へあつた  
あゝあゝ

○ 壬午以女師情系 藝子風俗

たに女師といふまゝの揚屋を  
よむに度々の興を借ふまゝの  
琴之味線胡弓ハリもさゝか  
あゝ、女師がははこめ、そのま  
身保年中より藝子といふまゝ  
出来たりこれいひのいひ女師  
いひ、いひと味線をかきとあ  
う、世歌おととを起さば中  
ひ、女師といひのたに女師と  
あゝ、いひと味線をかきとあ  
と月ドもあつた

○ 公難を即一曲

昔のうゝひまの朗誦愛が  
あり又いひあり、秋と  
ありと白拍子、女師といひ





是より  
西へ  
名を  
入る  
人  
あり

米番所

西大門口

つがひの夜

以の位

小天井

小天井

小天井

江戸吉原のつまぶしと改新町の  
まがねづりくし廓（えんせう）の事也

○江戸暖簾屋名別

江戸東の馬（うま）しり官家の先（せん）結（むす）と  
名（な）のうまんがく（く）はく（く）のうめん  
い柳（やなぎ）津（つ）の布（ぬ）長（なが）こに人（ひと）之（の）懐（くわい）とて  
總（そう）分（ぶん）小（こ）梅（うめ）子（こ）草（くさ）の尻（しり）結（むす）あり申（まを）法（ほう）  
より（より）志（し）代（だい）尺（しゃく）舞（ま）の先（せん）許（もと）をたて高（たか）  
州（しゅう）は自分（じぶん）小（こ）かく（かく）店（たな）とくさ（さ）芝（しば）湯（ゆ）京（きやう）の  
古（こ）更（さら）也（や）南（なん）津（つ）の暖（ぬ）簾（せん）古（こ）の株（かぶ）もあ  
る（る）也（や）ありし今（いま）緋（ひ）波（な）をりあり  
ぬ（ぬ）結（むす）と尻（しり）結（むす）あり新（しん）波（な）女（にょ）郎（らう）と  
いふ事（こと）その（その）め（め）は（は）大（だい）台（たい）  
傍（はた）の衣（い）の尻（しり）結（むす）よりお（お）こ（こ）り（り）といふ  
滋（し）もありとかく今（いま）新（しん）波（な）の志（し）もい

お結（むす）と付（つ）也

○和氣新号

江戸の結（むす）といふ君（きみ）を是（こゝ）も十分（じふぶん）  
ありしとくはく（く）の結（むす）とく（く）分（ぶん）の價（あ）  
りト（と）記（き）り是（こゝ）ありしを代（だい）和（わ）字（じ）と  
まを今（いま）めてい價（あ）も（も）分（ぶん）小（こ）ま（ま）い（い）ま（ま）  
たり（り）奥（おく）より（り）

○元由猪

江戸の元（もと）は都（みやこ）邊（へ）原（はら）のといふかゝの  
法（ほう）ちがひあり注（しゆ）音（おん）平（へい）ね注（しゆ）法（ほう）盛（せい）  
六（む）波（は）羅（ら）小（こ）左（さ）衛（ゑ）のとき極（ごく）へき由（ゆ）  
三百（さんひゃく）人（ひと）元（もと）の極（ごく）角（かく）といふしへい  
元（もと）とも（とも）極（ごく）式（しき）より（り）し（し）小（こ）今（いま）い首（くび）  
元（もと）の威（い）勢（せい）ありし（し）も其（その）金（かね）風（ふう）級（きゅう）

揚屋多敷屋より呼ばるよ来る時  
女小ウラウラウと笑る也これ古代の  
櫓の鈴りし由也しほふすん  
何よも新艘の女郎は内を  
脱くを夫識まよすむこの也  
新艘出るとの加例の廓中  
ありといふ事也

○呼ばる女故實

正月三月又月七月九月  
式日禮月又降附し新艘出日  
揚屋茶屋より呼ばる女子と  
女郎一人は中居一人は外にあり  
ありこれも往古の毎日は格あり  
し今い漸くは中目外あり  
是高津のくるまの右更也

○勸をき姑を級不打由縁

芝居のかりり或は物を独お撲る  
又坂町中を級打く由るは其の  
たいに通る船西の大門の子をか  
おやめを賣取へかぶあくと打を  
はき大坂中を級打くは其の  
所の人よるねべし

○夜見世嬉名花

は廟開敷の面は夜見世ふし  
正月より小延室来年より正月  
より十月晦まで夜見世は  
東西の大門開敷より小そのら

享保年中又嘉永月極月二ヶ月  
もれ教免ありと今い年中夜見世  
ありと白目紙あざむき盤を置り  
うきあざむき

○限を被作法

南洋の船の府の志々夜夜のまき子  
申指中たいとうら世指者入り世あり  
んをいたいことをお島中ゆき遊世  
大門口を走め是けを被と限とら遊  
はを被らんとこの船中揚屋を船の  
法をぬきぬきのくのきりし船の  
船の光白目小筆

度の角先一町の  
ころんら

○價諸分

○右支 六拾九文

○天神 二拾三文

○天祥寺祭臺といふ時と

- ・ 朝より午時と 拾又文
- ・ 午時より暮と 拾又文
- ・ 暮より亥刻は也 二拾又文

右見せしむるにびらりて居宅に  
て賞とれたる

・一座 三匁五分

又茶屋母くらり

・一切 四匁二分

○ 蕪子 びい 貳拾八匁

但し中夜賣とらふとれたる

天祥と曰り

茶屋母くらり

・一切 三匁

○ 和紙 七百匁

但見せしむるに 四拾匁

右右の通の重版定の酒料も更  
但見せしむるに一匁切ホの酒料  
別の定め

朝版料理代 揚屋 三匁  
茶屋 四匁五分

月酒料 日 六匁  
日 三匁五分

出供酒料兼用 日 四匁五分  
日 三匁五分

但右酒料は附く足合之係れらる下並

右の介振書の所記は法兼用より好  
料理にお封紙を格別のり

右定の介兼用かりより中  
中の定之目也

○級日定月

正月	三ヶ日 四日 五日 六日 七日 九日 十日 十四日 十五日 十六日 廿日 廿五日 廿八日
二月	朔日 初午 二午 十五日 廿二日 廿五日 廿八日 外にひびん七日が居
三月	朔日 三日 四日 五日 六日 七日 十六日 廿日 廿五日 廿八日
四月	朔日 八日 十五日 十七日 廿日 廿一日 廿五日 廿八日
五月	朔日 五日 六日 七日 八日 九日 十五日 廿日 廿八日 晦日
六月	朔日 七日 十日 十二日 十四日 十五日 十六日 十七日 廿日 廿二日 廿四日 廿五日 廿七日 廿八日 廿九日 晦日

七月

朔日 七日 十日  
十四日より晦日まで

八月

朔日 十四日 十五日 十六日  
廿五日 廿八日 外にひびん  
七日が居

九月

朔日 九日 十日 十一日 十二日  
十三日 十四日 十五日 十六日 廿日  
廿一日 廿二日 廿四日 廿五日 廿六日  
廿七日 廿八日 廿九日 晦日

十月

朔日 六日 十日 十二日 十三日  
十四日 十五日 廿五日 廿八日 亥子

十一月

朔日 八日 十三日 十五日 十六日  
十七日 廿五日 廿八日  
外に家々のすゝもひ

十二月

朔日 十三日 十五日 廿五日  
廿八日

但し

外に家々の餅つきと節分  
庚申年申段日也







天神之分

うら木 うろ 兼重 雅波津 とまの

大よと とまの ハー海 いでの

初とく 大務 二の町 うこの

あらしと所 彦木屋熊次郎

左支之分

ひるづ うら 神代 六つ うらえ

万代 とくま 子代 うらえ

九重 とくま 若くろ うらえ

室此戸 あま 去日 うらえ

花まら はし 八重 うらえ

立たる まこの 店 うらえ

あらしと所 和泉屋守玄清

右支之分

花まき うら 神代

天神之分

か木 うら 中り木 うらえ

常盤木 小と ところ うらえ

後とぬ とまの 舞 うらえ

あらしと所 大坂屋右亮

左支之分

ひる後 うら 神代 七 うらえ

とん系 うら 神代 弱 うらえ

和国 うら 神代 派 うらえ

玉此井 うら 神代 君 うらえ

谷乃戸 うら 神代 まき うらえ

ととろとと 彦屋守玄清

天神之分

新しき	かよひ	小まつ
金 崎	まつの	あ松
こしき	兼	小こ
弁 中	ふ	こ
江 ぐら	よ	そ
たのぎ	き	き
	小	

とらうとら 恒古屋吉吉湯

天神うか

おごまた	あ	カヤ
小ひら	大よど	つら
七うら	はしま	こ

とらうとら 上林屋作吉湯

天神うか

増尾の 朝か

若とく	大	ひ
こ 圃	大	大
義とら	は	ひ
るに津	小	ん

とらうとら 飛屋七左衛門

天神うか

いさ乃	七	曲
本花	あ	よ
らたの戸	あ	い
三うら	竹	ら
今たこ	飛	う
あた乃	小	う
志の先	小	あ

とらうとら 世田屋大次郎

み 五廿二

天神之分

長山

つひのあしき

まつの

かこひえか

雄

に乃巻

本れ花

いづら

松がえ

花さぬ

とり琴

まのふ

まのき

まらこ所

紀伊國屋草七

天神之分

緒うら

ちひてうふ

こまの

あやたさ

万こ八重花

たうこ

かこひえか

きい

まんよ

ちこそ

七うら

こちう

きつ乃井

小ひる

大よど

げい子の分

こま者

一列

石壁

ことうそ

上村屋草七

天神之分

こようせ

こまのこまき

こまの

あげきた

小つたまき

こまの

大たし

ひのこまき

こまの

ことうそ

右田屋草七

天神之分

こつ浦

こまのこつ花

こまの

瀬山

あや玉うら

こまの

ことうそ

淡路屋草七

天神之分

22

23

袖一バ	妻	萩乃井	うら
なげと	そよの	友うら	このい
深井	名の	齋さね	まこ
あらく	あま	妻小姓	しん
なるの	うのえ	玉うら	なるの
こらとせ	その		

とどうと  
**瓶屋其右衛門**

天神と

からが	新	小ひ	この
あし	徳	うら	とこ
あま	その	うら	まこ
八重	大	経の	万
あ	ま	うら	くち
阿や	ま	うら	りの
ま	ま	うら	まの

子代	う	あ	と
金山	い	ら	と
玉か	梅		小

さう	ふ	あ
うら	う	ら

とどうと  
**金福屋其右衛門**

きん	こ
右	ま
か	ま
さん	た

新系正所  
**披露屋其右衛門**

28  
 29

かこひえか

まの世  
とくえ  
さんご

せ川  
まの崎  
初きく  
とりのえ

新系橋町 **とがや武志清**

かこひえか

とやえ  
ようせ  
琴うら

とりの  
小な  
とりの

新系橋町 **大坂屋仁玄清**

かこひえか

音づ  
まのう

まの世  
さんご

新系橋町 **外屋巳之介**

かこひえか

小さら  
苑まの  
とる乃

拍末  
うせ

新系橋町 **車屋権八**

かこひえか

袖き  
とりの  
きくえ  
とも一

瀬川  
さんご  
長う

とらう  
**かいでや七**

げい子えか

ひ

七

ひまろ	いこぬ	とごら
とく乃	行乃	深まの
小きく	うこの	龜乃

ことうとう 山本屋菊松

げい子く分

阿この	おまの	け松
きつれ	小夏	市松
花世	きつ松	翠松

ことうとう 扇屋儀玄清

げい子く分

らせ	もくが	まきれ
ら道た	抄さ乃	こぎん
らるぐ	こことこ	中か
こどく	いさの	ちや乃

らる乃	うさな	せい
とめの	とけの	ととく
とく松	ひび乃	
たもの	阿と	

ことうとう 扇屋若玄清

げい子く分

うや	まんよ	みら
若乃	若希	小乃
善子	とげ松	万乃
十又	小まの	小つ
若乃	姫松	小く
まの枝	いさの	小燈
とくや	とらん	

ことうとう 遊江屋久七

み

い



かこひさか

このも 琴せ 久の  
霧丸 糸九 糸二  
王う乃 りんど

さうとせ 大坂屋百松

けい子さか

きよと 糸糸 王うが  
まの いさこ 小つら  
ひさ乃 さんご 糸松  
阿と柳 ひでまの 小まさ  
いくせ 圃まの 十を糸

さとうさう 日睦屋吉三清

かこひさか

英くら さくま 玉木

はまぎ とうの 月丸松  
た見 ぶとれ 琴堂

さとうさう 近江屋信三糸

かこひさか

から琴 玉づら ぬがと

けい子さか

まの松 まのえん  
所の う丸

さとうさう 丸屋玄介

かこひさか

ていう 小つら いくせ  
いろり 糸丸 いづと

けい子さか

ひで松

とどろとど 得屋卯玄湯

かこひきか

七うら 龜つら  
あきき やよひ

とどろとど 川崎屋辰女

かこひきか

袖いば 瓦うた 龜づら

あらし前 紀伊國屋次玄湯

かこひきか

こらら どりん  
相見 袖糸  
小さい 志のぶ  
けい子きか 吉まの

とどろとど 龜屋早玄湯

かこひきか

みやこ 松がえ ぎらら  
小たう 龜やの

とどろとど 松屋徳玄湯

かこひきか

ゆぐえ とも香 つらえ

とどろとど 阿波かや新丸

かこひきか

せの所 さんど うた町  
きんど 志がら

新系比所 倉橋屋元七

かこひまが

おのよ たうを つまう

いよ子 まさ乃

とどうとど 河内屋若丸

げい子まが

きんこ

とどうとど 松井屋孫三郎

げい子まが

おく系 つまら

くらと所 栄屋嘉三清

かこひまが

さうた ひなげ らとせ

うめり 細水

げい子まが

お木 おま門

とどうとど 長文字屋金三清

げい子まが

まろ おせ 長ま門

小ま門 金吾

龜づら らとせ

くらと所 新屋徳三清

かこひまが

六十一  
六十二

とりへ 咲 東雲  
東ふ 十布

けい子えか  
こま 小とと  
小むゆ さく乃

あつこ剛 河内屋平二布

かこひえか  
あやぢ ちやこ

けい子えか  
小どく せんよ  
いゆき 小まの 小ひま  
小さく

あつこ剛 河内屋源三清

かこひえか  
つなま ちのふ うさ木

より乃 小とろ ちの音  
やうひ ちのの

あつこ剛 井筒屋平三清

かこひえか  
あししま 希き  
とろとと 袖こい

けい子えか  
いと巾 希ちの  
さうえん ちちの

あつこ剛 卓燈屋久三清

けい子えか  
さうへ 小とと  
小登ん かせん 井こうら

六十三  
六十四

まちこそ 系屋惣玄浦

かこひまき

琴江 仲系 名山

まちこそ 系屋虎吉

かこひまき

大老し ぶこの いくれ  
つるさね 弟代

新系まの町 井屋孫左衛門

かこひまき

まゆよ ひさ乃 子さね  
まにい きんご

新系まの町 河内屋文四郎

とくは かつひら 善さね  
とこと ともと

新系まの町 河内屋若次郎

かこひまき

すのえん 袖しん づるさね  
ぶんど 小系 しろ乃  
とくはご 小柳 とのこ  
さんご とりん  
袖さね まねぶ

新系まの町 本屋松右衛門

かこひまき

いせ乃 ぐいん ぶど乃  
ふさの 何中め うせん  
きんご 小いと 姉はる

新系々々町 東ノ 系屋平云清

かこひまが

ひるづる

きぬまご

すのり

押こま

まけ

通ひ路

新系々々町 西ノ 系屋平云清

かこひまが

ちふん

ゆさく

ふこの

こよま

まのま

新系々々町 押見やひで

かこひまが

松太

まうこ

何づま

押こま

ひるづる

いろ

右の

ことうら

系屋新云清

かこひまが

さきの

天満屋平云清

かこひまが

いろは

和泉屋九右衛門

かこひまが

何や

今井屋平云清

かこひまが

さんご

あうら

きど

あしま

金崎

小いせ

大坂屋平云松

八十七

かこひまが  
かろ

ととろとろ  
綿屋と云清

かこひまが

一 疾 舞つる  
いと の 若さ死 死と乃

ととろとろ  
あは屋と云清

かこひまが

玉で さまの  
たま琴 いと乃

新あり町  
塩屋と云清

かこひまが

小じりた 若さま 世川

ととろとろ  
あは屋

新あり町  
塩屋

かこひまが

ととろとろ  
若さま

新あり町  
丹波屋源次郎

かこひまが

若さま  
いと乃 小てる

新あり町  
赤屋と云清

かこひまが

若さま  
いと乃 若さま  
あは屋の 小てる

うらん 舞づる  
さまの いハヤ  
竹まの りとろ

新系とく所 夜屋古ま湯

かこひまが

松しま 小まの ちのう  
押とづり 翠とろ きく江

新系とく所 大坂屋古ま湯

かこひまが

まいふ とと かね

新系とく所 紀伊國屋武ま湯

かこひまが

つふ ととまき よろ

ゆざね きく江

右此おまけ女希とらんぞう等の  
名よせ追ふ出来出くやん

げい者まが

ちらぶ所 いたり見世

竹本松八 八尾八 八文字八  
日 義八 日 吾八

ととりとく 大黒屋とせ

新系とく所 名八  
日 新系とく 日 津次希

ととりとく きやう屋見世

竹本屋八 日 友八 日 信八 日 鐘八



新なり町 今もや見せ

竹中妙林 日 用女 日 渡八

新なり町 伴勢屋見せ

竹中太花 日 毎若  
和七日 嘉六

### 揚屋之分

多し西 渡本屋 日 多し 高橋屋長次郎

日 渡本屋 渡本 日 河内屋長次郎

九人丁 山口屋長次郎 九人丁 佐吉屋長次郎

日 吉田屋長次郎 日 井筒屋長次郎

日 扇屋長次郎 日 新なり丁 大和屋長次郎

新なり丁 佐吉屋長次郎 多し西 渡本屋長次郎

多し西 渡本屋長次郎 多し西 渡本屋長次郎

### 茶屋之分

辰巳屋長次郎 多し西 渡本屋長次郎

兵庫屋長次郎 河内屋長次郎

渡本屋長次郎 紀伊屋長次郎

扇屋長次郎 天正屋長次郎

上村屋長次郎 道口屋長次郎

金屋長次郎 平野屋長次郎

松屋長次郎 高橋屋長次郎

さしや 渡本屋長次郎 横屋長次郎

岩井屋長次郎 平野屋長次郎

大村屋長次郎 長門屋長次郎

大和屋長次郎 横屋長次郎

堀屋長次郎 京屋長次郎

津田屋長次郎 古橋屋長次郎

吉野屋長次郎 大黒屋長次郎  
渡本屋長次郎 扇屋長次郎  
渡本屋長次郎 佐吉屋長次郎

八百屋新去清	杉屋新去清
京屋新去清	木中屋新去清
正木屋新去清	便右屋新去清
辰屋新去清	本屋新去清
龜甲屋新去清	さかや新去清
吉野屋新去清	吉野屋新去清
<b>和氣女房屋之分</b>	
紙屋七去清	布屋次去清
中徳屋新去清	久室新去清
中徳屋新去清	紀屋新去清
徳法屋新去清	天皇新去清
川崎屋新去清	大松屋新去清
吉野屋新去清	河内屋新去清
道江屋新去清	和氣屋新去清
浪屋新去清	金屋新去清
堺屋新去清	井筒屋新去清
河内屋新去清	大和屋新去清

堀屋新去清	近江屋新去清
綿屋新去清	小中屋新去清
横屋新去清	中屋新去清
河内屋新去清	大西屋新去清
大徳屋新去清	金屋新去清
京屋新去清	大和屋新去清
辰屋新去清	横屋新去清
兵衛屋新去清	紀屋新去清
大和屋新去清	井筒屋新去清
紙屋新去清	丸屋新去清
難波屋新去清	横屋新去清
阿比屋新去清	龜屋新去清
堀屋新去清	宇治屋新去清
京屋新去清	

商人各屋之分

新町屋新去清	丁子屋新去清
東口	虎屋新去清
通り	山本屋新去清

ふげん 彰勝要法 清心院

極本所 西口九朝 極本屋平丸

三味線所 多々毎管 辰屋平左清

いし細工 日 綿屋一右衛門

左支波 日 廣徳屋右左衛門

麩敷名物 日 和泉屋右左衛門

日 日角 津國屋他左清

諸國 日 中上公

遊所 古今柳陌大全 全一冊

此書は唐土柳巷此起本朝諸國免

許乃遊里地名花街の名物古今花

里上古より遊里にあり相續交経の

地名代都叙して和漢此古書七十有

二部と考古款を参考し其所

中縁の事申すて委しく出と

郡橋原 細見圖 全一冊 出末

浪華 畫工 寺沢昌次

中無工の旨、師信宗と云ふ事あり石を師と

天明三卯二月

東都 日本橋南一丁目 須原屋茂兵衛

京都 二條通富小路西へ 野田藤八

大坂 本齊橋北詰 和泉屋卯兵衛版



早稲田大学図書館

011688994960